

## 山野浩一さんのご冥福を祈って



(中日新聞社提供)

山野浩一さんが亡くなられた。享年77歳。食道癌を患い、闘病中であつたが、7月20日、ついに帰らぬ人となられた。目を閉じると、くりくりとした眼差しが印象的で、いたずらっこのような山野さんの顔が浮かんでくる。

最近の日本ウマ科学会の会員にはあまり馴染みがないかもしれない山野さんは、小説家であると同時に、競馬評論家としても競馬ファンの間ではつとに有名である。特に血統評論家として活躍し、『名馬の血統』や『サラブレッド血統事典』など数々の名著を上梓している。競馬界における山野さんの功績や業績は枚挙にいとまがないのだが、ここでは当学会との関係に絞って彼の功績を拾い上げてみたい。

山野さんは、1990年の日本ウマ科学会設立時からの会員であつた。ちょうどこの年、山野さんは『サラブレッドの誕生』でJRA馬事文化賞を受賞。その賞金100万円をすべて当学会に寄付されたのである。当時の学会執行部は、山野さんのご芳志に応えるため、これを基金として1995年に学会表彰制度を立ち上げ、今も毎年、学術集会のうちに学会賞や功労賞などの表彰が行われている。山野さんはまた本誌ヒポファイルの編集委員も永く務められ、多忙な時間を割いて当学会の発展にも貢献されてきた。辛口の競馬評論で有名な山野さんだけに、当学会に対するご意見やご要望も多々あつたこととは思う。が、実際には終始静かに、かつ親身になって当学会の成長を見守っていてくれた。それはきつと、研究者や学者に限らず、馬に関わるすべてのジャンルの人々が学会の傘の下に集い、自然科学や人文科学の領域から馬と人との関わりを探究していこうとする当学会の未来に、山野さんが大きな期待を寄せられていたからに違いない。

そんな山野さんの姿が、ここ数年、当学術集会の会場から消えた。年に一度、学術集会でお会いするのを楽しみにしていた私にとって、それは寂しいことだった。その後、山野さん最愛の“みどり”夫人が難病に冒され、日々その介護に奔走されているとお聞きし、学術集会へのご無沙汰もそれが理由と思っていたのだが…。そんな折りに届いた山野さんご自身の訃報であつた。当学会が山野さんから受けた恩義は大きい。当学会としても、また私個人としてもその恩義に十分に報いてはいない現時点での訃報であつた。とにかく残念でならない。今はただただ心から、山野さんの冥福を祈るばかりである。合掌。

日本ウマ科学会会長 青木 修



旧根岸競馬場にて (競馬ブック提供)

# 第 30 回日本ウマ科学会学術集会のお知らせ

会期：2017 年 11 月 27 日（月）12：30 より

11 月 28 日（火） 9：10 より

会場：国際ファッションセンター（KFC Hall & Rooms）

〒130-0015 東京都墨田区横網 1-6-1 （TEL: 03-5610-5801）

プログラム：

11 月 27 日（月） 一般講演・第 30 回大会記念シンポジウム・ランチョンセミナー

企業展示・JRA との合同懇親会

11 月 28 日（火） 一般講演・優秀発表賞候補講演・2017 年学会賞受賞講演・2017 年奨励

賞受賞講演・臨床委員会企画招待講演・臨床委員会企画症例検討会・

ランチョンセミナー・定時総会・企業展示

なお、11 月 27 日（月）は、第 59 回 JRA 競走馬に関する調査研究発表会が併行開催されます。

参加費： 会員 5,000 円 非会員 7,000 円 学生 2,000 円（学生証をご提示ください）

\* 事前登録はありません。当日、受付（KFC Hall：3F）にてお支払いください。

## 【第 30 回大会記念シンポジウム】 （Room 115：11 月 27 日（月） 13：30-15：30）

座長：楠瀬 良（日本装削蹄協会）

テーマ：日本の馬の歴史と利活用からみた将来展望

- 日本の馬の歴史 楠瀬 良（日本装削蹄協会）
- 日本における馬の利活用 荒川由紀子（農林水産省）
- 日本在来馬の現在・未来 藤田知己（全国乗馬倶楽部振興協会）
- 内国産乗用馬の現在・未来 山下大輔（日本馬事協会）
- 日本のサラブレッドの現在・未来  
競走馬のセカンドキャリアへの展開 角居勝彦（JRA 調教師）  
競走馬の馬術競技馬への転用 木口明信（日本馬術連盟）
- 馬の将来展望  
我々は馬のために何をなすべきか 局 博一（東京大学名誉教授）
- 総合討論

## 【2017 年奨励賞受賞講演】 （KFC Hall：11 月 28 日（火） 13：00-13：30）

座長：田谷一善（日本ウマ科学会副会長）

テーマ：ウマ繁殖分野における AMH 検査法および胎子超音波検査法

講演者：村瀬晴崇（JRA 日高育成牧場）

## 【2017 年学会賞受賞講演】 （KFC Hall：11 月 28 日（火） 13：30-14：00）

座長：桑原正貴（日本ウマ科学会常任理事）

テーマ：馬呼吸器感染症の病態解明ならびに診断・治療・予防法に関する研究

講演者：帆保誠二（鹿児島大学）

**【臨床委員会企画 症例検討会】**

(Room 115 : 11月28日(火) 9:10-10:50)

座長：中井健司（うしや競走馬クリニック）

コメンテーター：Dr. Raymond Hyde (American School of Equine Dentistry)

テーマ：馬の歯牙疾患

パネリスト

1. 中井健司（うしや競走馬クリニック）  
競走馬のデンタルケアについて
2. 佐藤正人（NOSAI みなみ）  
複数回の拡張処置を実施した Periodontal disease
3. 前田昌也（日高軽種馬農協）  
繁殖牝馬サラブレッドにおける歯科由来の副鼻腔炎の1例
4. 伊藤桃子（株式会社 Equicure せりの馬診療所）  
咀嚼面からは判別不明な歯髄炎に対する診断と治療

**【臨床委員会企画 招待講演】**

(KFC Hall : 11月28日(火) 14:10-16:30)

座長：中井健司（うしや競走馬クリニック）

テーマ：Dental care to improve a horse performance

講演者：Dr. Raymond Hyde (American School of Equine Dentistry)

**【問い合わせ先】**

○日本ウマ科学会事務局

【ADD】〒329-0412 栃木県下野市柴 1400-4

JRA 競走馬総合研究所内

【TEL】0285-39-7398

【FAX】0285-44-5676

【E-mail】e-office@equinst.go.jp

# 馬事往来

## ばんえい競馬 再生 10年 ～十勝の馬文化を支えて 旋丸 巴

Ban-ei Horseracing:  
Supporting Tokachi's Equine Culture  
in the 10 Years Since its Revival  
Tomoe TSUMUJIMARU



旋丸 巴 (つむじまる ともえ)  
作家、NPO法人とかち馬文化を支える会専務理事。  
1959年、大阪府生まれ。酪農学園大学卒業後、競馬図  
書出版社勤務を経てフリーに。92年に夫と十勝管内芽  
室町に移住、現在は純血アラブ馬、山羊、犬、猫、鶏、  
鴨と暮らす。著書に「ハネムーンは巴里の競馬場」「馬  
をめぐる冒険」「赤べえ」など。「馬映画100選」で  
2004年JRA馬事文化賞を受賞。

馬上によじ登った少年は、おずおずと右手をあげて  
ピースサインを作ったけれど、その顔には、嬉しさと  
誇らしさの他に、少々の恐怖も交じって、少なからず  
泣き笑いの様相を呈している。そうして、記念撮影を  
終えた彼は、馬から降り、再び恐る恐る馬に近づくと  
ニンジン差し出す。その手を取って、

「ほら、馬に触ってご覧」と小さな手を大きな馬体に  
ベタリと押し付けると、

「おわっ！ めっちゃ温かい!!」

既に、彼の顔から恐怖は消え去って、笑みが紅潮した  
顔を席卷している。

上記は、我が「NPO法人とかち馬文化を支える会」  
が行っている「馬の出前授業」の一場面。当会では、  
年に6～7回、こうして馬と共に小・中学校に出かけて  
は出前授業を実施する。同行してくれるのは、ばん  
えい競馬の現役調教師、騎手、厩務員の皆さん。馬は、  
ばんえい競馬の広報馬たちである。彼らの協力のもと、

児童・生徒は馬車や馬ソリに乗り、体重1トンになん  
なんとする広報馬の背にまたがって写真撮影を楽しみ、  
ニンジンあげ、馬体に触り、馬を実感する。これが  
我々の出前授業…と、おっと、しかし、その前に、さ  
らに重要な授業用プログラムもある。それが教室での  
「馬の学習」である。

脱ゆとり教育で、勉学に励むのに汲々としている小  
学生・中学生に、「お馬さんに触って楽しかったね～」  
だけの「お遊び」に付き合ってもらうのは心苦しいし、  
当会の目指す「馬文化の啓蒙普及」にもそぐわない。  
それで、実馬とのふれあいの前に必ず1時間、教室で  
「馬の学習」を実施してもらうのだけれど、彼らに望む  
のは、決して「馬博士になってもらうこと」ではない。  
そうではなくて、我々が実施するのは馬を切り口とし  
た学習。具体的には、かつての馬耕や馬車などの写真  
を見つつ学習する「馬と共に歩んだ北海道の歴史」だっ  
たり、馬や犬・猫などの「歯」の写真を見比べて考え



写真1, 2. 馬の出前授業。馬ソリに乗ったり、馬に触れたり。子供たちは馬を実感して満面の笑みを浮かべる。

る「肉食動物と草食動物の違い」だったり。馬を通じて、学力の向上や情緒教育に役立つことが、我々の目的なのである（写真1, 2）。

### ばんえい競馬廃止の危機から生まれた「とち馬文化を支える会」

出前授業以外にも様々な活動を展開する「とち馬文化を支える会」。その多様な活動内容については後述するとして…。

この会が発足したのは、ちょうど10年前の2007年8月14日。ご案内の読者も多いことと思うけれど、この前年、ばんえい競馬は廃止の危機に震撼した。危機、というより、ほぼ現実となりつつあった廃止。2006年12月には、各新聞に「ばんえい競馬廃止」の大活字が躍り、気の早い新聞社では「消えゆくばんえい」という連載記事まで掲載した。正に絶体絶命の崖っぷち。いや、片足は、既に崖を踏み外していた。実際、それまで、同競馬を主催していた4つの市、即ち、旭川、岩見沢、北見、帯広の内、帯広を除く3市が経営不振を理由に撤退してしまったのだから、人口17万人の帯広市が単独で、しかも赤字必至の競馬を抱え込むのなんて、と、一般人なら誰もがそう思って当然。帯広市民の中からも「ギャンブルのために血税をつぎ込むのは到底、許されない」という声が沸き上がり、しかし、そんな論調に承服しない人々の声も同じように沸き上がった。

我が同志たち、即ち、馬好きの人々から、それも全国から、である。

勿論、私も、その1人であって、ただし、当時の「ばんえい競馬存続論」の大方とは、ちょっと、見方が違ったのも事実。存廃論議喧しき頃、「ばんえい競馬が無くなれば多くの人々が職を失う」とか「現役馬600頭を含めて多くの重種馬が食肉になるしかない」といった廃止反対意見が多かったし、それは私も否定しなかったけれど、しかし、私が、ばんえい廃止絶対反対を主張した理由は、そこにはなかった。

### ばんえい競馬が「文化」である本当の理由

本誌読者には、釈迦に説法だけれど、今しばらくお釈迦様各位には私の下手な説法に付き合ってくださいとして…。

馬が家畜化されて5,000年、その長い歴史の中で、

馬は人のために数々の使役に供されて来たのだが、その多くは、馬の後部に何かの道具を付けて引っ張らせること、つまり「牽引」作業であった。馬車、馬ソリなどの運搬機具、プラウなどに代表される農機具もそうであるし、戦場でも映画『ベン・ハー』でもお馴染みのチャリオットと呼ばれる馬戦車も、長年大活躍。昨今、話題の「馬搬」と呼ばれる山から木材を搬出する「地駄引き」も馬による牽引作業であるし、漁港では船を岸に寄せるウインチを巻き上げるのにも馬が使われた。他にも、ありとあらゆる場面で「馬による牽引作業」は、機械化以前の全世界で日常的に動力として活躍して、つまり、馬が物を曳くことで世界が成り立っていた、と言っても過言ではなかったのである（写真3）。

この「馬による牽引作業」が、機械化以降、日本で言えば1960年前後、急速に姿を消す。牽引作業は機械に代わり、馬は競馬場と乗馬クラブに追いやられ、馬が物を曳く光景はどこに行っても見られなくなった。



写真3. 漁村でも馬はなくてはならない動力源だった。  
(1962年・とち管内豊頃町) 写真提供: 荘田喜與志氏

……？ どこに行っても？

そう、賢明な読者なら、もうお気づきでしょう。馬による牽引の姿を今に伝えるもの、それこそが「ばんえい競馬」なのである、と。

「ガラ」と呼ばれる首に装着する馬具と「梶棒」と呼ばれる長い棒で牽引物を馬に繋ぎ、ロングレーン（長手綱）だけで馬を御する技術、これこそ、人と馬の5,000年の歴史で培ってきた「馬文化」の結晶。

ばんえい競馬は「生きた歴史教材」である、と主張すると、大風呂敷を広げているように思われるけれど、馬と人の歴史を知る人なら、この文化的価値をご理解くださるだろう。

さて、しかし、そんな歴史的価値だけが、ばんえい競馬の文化的価値ではない、というのは、存外、認識されていないので、もう少しだけ下手な説法を続けさせていただくとして、以下は、かつて北海道新聞夕刊に寄せた拙文の一部。掲載されたのは2006年12月11日、ばんえい競馬廃止の業火燃え盛る時期である。

私が存続を望む本当の、そして、最大の理由、それは「ばんえい競馬が代替の効かない稀有な馬文化だから」である。（中略）

開拓、農耕に大きく貢献した農用馬。その子孫がばんえい競走馬であり、馬にソリを引かせる技術も、この競馬に受け継がれている。

しかし、そういう歴史的価値だけが、ばんえい競馬の文化的価値ではない。

力自慢の重種馬がソリを引いて走る。これが世界に例を見ない競技であることはご案内の通り。ということは、つまり、である。「世界最高の牽引力を持った馬達が、ばんえい競馬には集結している」ということなのである。

サラブレッドの最高峰が凱旋門賞やブリーダーズカップに結集するように、世界から導入された最強の牽引馬が力を競うのが、ばんえい競馬。しかも、これら重種の最高品質馬を百年余（公営としては六十年）選抜し続けて来た、というその点が偉大なのである。

世界には農耕や林業を支える重種馬が多く飼育されている。フランスのペルシュロン種やブルトン種、アメリカのベルジアン種などが、それ。そうした世界の重種馬の血を集め、能力を研磨、選抜の結果生まれた頑健かつ強力なばんえい競走馬は、「重種の世界チャンピオン」といって大袈裟でない。（中略）

過日、「ばんえい競馬は世界遺産に登録されて不思議



写真4. 廃止論を乗り越えて奇跡的に存続となった「ばんえい競馬」  
（写真提供：ばんえい十勝広報）

ない」と公の場で発言したら、取材陣からは苦笑が漏れたけれど、今記した「世界の頂点に立つ牽引レース」だという認識があれば、笑ってなんかいらなかったはず……じゃないですか？取材者諸君。

我ながら好戦的で大人げない語調だけれど、当時の緊迫した状況を鑑みて、その点は、ご容赦いただくとして…。ことほどさように絶大な文化的価値を持つ「ばんえい競馬」。だから、この貴重な馬文化を、過去のうたかたと消えさせて良いはずもない。そう考えたのが私だけではなかった証拠に、ばんえい存続の声は日に日に高まり、ついには、奇跡の大逆転で、この稀有な競馬は首の皮1枚のところで命を長らえることが叶ったのである（写真4）。

#### 馬文化すべてをひっくりかえすため応援

かくて辛くも一命を取り止めた「ばんえい競馬」。ではあるけれど、だからと言って、経営状況が突如として好転する見込みがあるわけなし。つまり、存続叶ったその日から、この競馬は、再び経営不振との戦いに引きずり戻された訳で、後に、当会創設メンバーとなった某氏が宣った。「行くも地獄、戻るも地獄」。誠に核心を突いたお言葉。

そうした危機感を敏感に感じ取って、存続が決まるや「このままでは折角存続しても再びピンチがやって来る」と各方面から様々な人々が動き出した。その時の詳細はキリがないから省略するけれど、またたく

ちに当会創設の構想が浮上。2007年4月の新生ばんえい競馬発足には若干の遅れを取りつつも、同年8月には、NPO法人とかち馬文化を支える会が誕生。理事長・柏村文郎帯広畜産大学教授を筆頭に、ばん馬生産の第一人者・佐々木啓文氏など馬関係者は勿論、十勝の経済界の重鎮である高橋勝坦帯広商工会議所会頭や、関東在住の競馬評論家・斎藤修氏など錚々たるメンバーが役員として、この会の創設に加わった。

ことほどさように豪華な顔ぶれに伍するのは僭越の極み。ではあるけれど、行きがかり上、私も役員の一員となって、しかし、この会が単なる「ばんえい応援」の会であつたら、恐らく、私は今のように事務局を引き受けることもなかつたらうし、いや、入会さえし



写真5. 出前授業では、馬とのふれあい学習の前に必ず1時間、馬を切り口とした学習を実施する。



写真6. 2015年からは、ばんえい競馬のルーツ「馬耕」を復元・伝承するために「馬耕技術伝承プロジェクト」にも取り組んでいる。

ていなかつたらうと思う。

「ばんえい競馬は当然として、この競馬を含めた馬文化全てを、ひっくるめて応援しようじゃないか」という高潔な理念が、私の琴線に激しく触れ、それが、今も私を当会の活動に奔走させている第一の理由なのである。

さてさて、しかし、そんな私事はさておくとして、こうして走り出した当会。10年の間には状況も変化し、活動内容も変遷したけれど、馬文化全部を応援しよう、という根幹は不動であつて、それだけに活動内容は、良く言えば多彩。正直に申し上げれば欲張り過ぎ。冒頭に記した出前授業を始め、数々の事業に取り組んでいる。試しに、2016年度に行った非営利活動を列記すれば以下の通り。

1. 教育活動…十勝管内小中学校での出前授業(写真5)
2. 福祉事業…学童保育施設での馬とのふれあい体験
3. ばんえい競馬支援事業……首都圏での「ばんえい教室」開催。帯広競馬場内でのイベント(クリスマス行事など)の開催。同競馬場内掲示板展開催、他
4. 生産者支援事業……共進会、草競馬協賛
5. 馬耕技術伝承プロジェクト……指導者育成、馬耕実演、他(写真6)



写真7. 2016年度は、ばんえい競馬の魅力を発信するために、長手綱の操作などを解説した映像を制作・発信した。



写真8. 昔日の馬と人の暮らしを聞き取り調査し、掲載した「馬文化新聞」は多くの読者を獲得している。

- 6. ばん馬ギャラリー運営……帯広競馬場内ギャラリーでの写真展・絵画展などの開催
- 7. ばんえい競馬魅力発信事業……騎手による手綱操作解説画像の発信（写真7）

その他、細かな事業はまだまだあるし、2016年度こそ実施できなかったけれど、毎年、馬学セミナーを開催したり、馬文化新聞を発行したりもしている。

特に、馬文化新聞については、機械化以前、馬と共に暮らした人の経験を聞き取り調査し、聞き書きとして収録した、その姿勢が多くの人に絶賛されていて…と、これ以上記すと自画自賛も甚だしいから止めしておくけれど、何しろ好評を博しているのだから、今年度こそは、何とか時間を見つけて新号を発刊したいと考えている（写真8）。

それにしても、である。こうして活動を並べ記してみると、百花繚乱というか、少しく「狂い咲き」の感

が漂う。勿論、かような次第を招いたのは、偏に「馬文化のためなら何でもする」という猪突猛進の専務理事のせいで、毎年、その活動は増大の一途。正に、当たるを幸い、ちぎっては投げちぎっては投げ…。現在、当会理事長は、前述の柏村教授から元十勝獣医師会会長の三宅陽一氏がバトンを受け取っておられるけれど、三宅理事長始め役員各位が、よくもまあ、上記の如き事業を許し、あまつさえ、一緒に東奔西走、時には先頭に立って大奮戦してくださるものだと、大感謝しつつ、驚く毎日なのである。

数年前、某お役所が当会の地域貢献に着目し、大層な賞の候補へ推挙を賜った。誠に有難いことで、視察に来られた選考委員各位には懸命に説明申し上げたが、期待虚しく、大賞も、その次の賞も、その次の次の賞も逃し、辛うじて特別賞をいただくに留まった。その際の選評、右の如し。「活動が多岐にわたり過ぎて、評価が難しかった」。むべなるかな。

### 非営利活動法人なのに営利活動？

特定非営利活動促進法というものが世に存在して、当会のようなNPO法人（非営利活動法人）は、この法律に則って活動をしなければならない。というのは当たり前だが、この法律、ちょっと面白いことが記されていて、同法第五条に曰く「特定非営利活動法人は、その行う特定非営利活動に係る事業に支障がない限り、当該特定非営利活動に係る事業以外の事業（以下「その他の事業」という。）を行うことができる。」。平たく言えば、収益活動をして良い、ということ。え?! 非営利活動法人なのに営利活動？ と誰しもが驚く。私とて例外ではなかったけれど、勿論、収益が出ても本来の非営利活動に使わなくてはならないし、会計も非営利活動とは分離して、ちゃんと届けなさい、というような決まりもある。要は、活動費を作るために正しい方法であれば、お金を儲けてもいいわけで、自力で稼いで自力で活動、ということであれば、「補助金頼み」よりは健全と言えるかもしれない。

という訳で、当会も、創設当初から営利活動は行っていて、これが意外な広がりを見せているのである。

当初は、帯広競馬場の片隅でボールペンやステッカーを細々と売っていたのが、しかし、これが予想以上の好評を得たから、役員もスタッフも大慌て。嬉しい悲鳴をあげつつ、新商品の開発に馳駆した。お陰様

で、今や取扱商品は150種類以上。しかも、この商品群の半分以上が当会オリジナルグッズ！自分たちで商品選択からデザイン、価格設定までしているんだから、どうです、えへん！

特に、役員の発案から生まれた、ばん馬の巨大な蹄鉄を使った商品はヒット。ばんえい競馬ならではの冬用蹄鉄は、「刻み」と呼ばれる凹凸が付いているから、「滑り止め」の意味を込め「受験のお守り蹄鉄」として人気を博し、長年、当会の活動の経済的支柱として君臨している（写真9、10）。



写真9. ばん馬の冬用蹄鉄は「滑り止め」の「受験のお守り蹄鉄」として大ヒット！



写真10. 馬のお尻をモチーフとした本革キーホルダー。作っているのは不登校のまま義務教育を終えた若者たちのグループ。彼らの社会復帰を援助する福祉活動の一環として、当会が販売に協力している。

他にも、ばん馬のシルエットを描いたTシャツや帽子、騎手服をデザインしたストラップから、ばん馬模様のタオル、グラス、名馬を意匠カップ、その他その他。こうした商品を開発するのは楽しいし、それが売れて活動費が潤沢になれば、なお万々歳。ではあるけれど、やっていて気が付いたのである。

これって、馬文化の啓蒙普及になっているよね、と。

例えば、当会のヒット商品の1つ「日本手ぬぐい」には、ばん馬の切り絵模様の横に大きく「鞍馬」という漢字が鎮座している。躍動感溢れる馬の絵柄が人気なのは当然だが、買う人の多くが、「鞍馬」という字を指して、

「これ、何て読むの？」と尋ねる。

当会のスタッフは、待っていましたとばかりに、ニコニコ微笑んで「ばんば、と読むんです。鞍は「ひく」という意味ですから、物を引っ張る馬、ということです」。

立て板に水で説明申し上げれば、お客様は「ほお～」と感心し、「これは珍しいし、ばんえい土産になるわ。みんなに買って帰って、「何て読むと思う？」って言ってやろう」と、購入枚数を増やす。

当会の売り上げは伸び、お客様は当地にしかないお土産に満悦され、そして、ここが肝心なのだけど…、地元に戻って「ばんえい競馬っていう珍しいもの見て来たよ」と、手ぬぐい片手に「鞍馬」の意味を語り、ばんえい競馬の感動を伝える。

おお、何たる理想的展開。

という次第で、営利活動とは言いつつも、ばんえい競馬や馬文化のPRにも大きく貢献する商品販売は、今や、当会活動にはなくてはならないものとなって、いや、めでたし、めでたし。

### 馬と共に、馬好きと共に

と、ハッピーなお話ばかりを書いってしまったけれど、無論、現実には、そんなに甘くない。新生ばんえい体制となって、馬券売り上げは、初年度こそ伸びたけれど、そこからは景気低迷に引っ張られる形で、毎年、確実に、正確に、狂いなく、減収。1日の売り上げが4,000万円などという日が続くと、格下のレースの1着賞金が7万円を割る、という自体にまで陥った。重ねて言うけれど、1着賞金が7万円ですよ。出走手当ではないんですよ。

かような状況で、厩舎に活気が生まれるはずもなし。

関係者の眼に指す光も日に日に細くなって行くよう  
で…。

追い打ちをかけたのが…本当は書きたくないのだけ  
れど…2015年に発覚した騎手・厩務員の馬券購入事  
件。スマホで簡単に馬券購入時代とあって、遊び半分  
に買った、というのが事の真相ではあるけれど、ファ  
ンの信頼を大きく裏切る行為に、「もうダメだ」と目を  
つむったのは私だけではなかった。

そんな折に行った理事会で、当会理事の1人、秋元  
和夫氏（帯広信用金庫・地域経済振興部長）が静かに、  
しかし、凜然と、かく宣った。

「馬に責任はない」

サラブレッドの2倍の体重を有するばんえい競走馬  
は、しかし、その雄大な体格に似合わず、いや、相応  
しくというべきか、実に温厚で寛大。

再び、私の旧稿の引用をお許しただければ……。

調教の終わった午後、厩舎を訪れると、洗い場に繋が  
れた馬達が日なたに顔を向け、目を細め口元を緩ませて、  
うとうと、うとうと。さながら巨大な猫が整列して昼寝  
しているようで、こんな姿を見るだけで、お腹の底がじん  
わりと暖くなる。

そんな彼らが、さて、しかし、一度レースに臨めば、凛々  
しく頭を上げて直線200メートルの走路に飛び出す。小ぶ  
りの第一障害は余裕でクリアして、しかし、次なる第二障  
害が、ばんえい競馬の正念場にして最大の見せ場。高低差  
1.6メートルの坂であるこの障害に差し掛かれば、どの馬も  
立ちはだかる急傾斜の麓で息を整え、小休止。しばしの静  
止の後、騎手がきつく絞った手綱を一気に許すと、たわめ  
られた巨体は瞬時に坂に向かって弾け出す。人間の胴体よ  
り未だ太い首をうねらせ、電信柱かと思紛う前足を坂に突  
きたて、筋肉を震わせて、馬達は懸命に坂を登る。たちま  
ち馬達の汗が湯気となって中空に立ち上り、太い吐息が両  
の鼻から二本、蒸気機関車のように噴出される。その力強  
いこと、その懸命なこと、健気なこと。これに感動しない  
人間がいるなら、その御仁は悪魔に魂を売った冷血漢だ  
と断言する。（じゃらん07年春号）

冒頭から当会の活動を自慢たらたら列記してきたけ  
れど、こんな魅力的な馬たちの前で、実は我々なんぞ  
無力もいいところ。出前授業にしても、イベントにし  
ても、人間が百万回、馬文化を放歌高吟しても、お馬



写真11. とかち馬文化を支える会では、毎年日本の馬文化を紹介す  
る「馬文化祭り」を実施。2010年には岩手のお祭り「チャ  
グチャグ馬コ」を帯広市内と帯広競馬場で披露した。

様が登場すれば、聴衆の心は一瞬にして馬に浚われる  
（写真11）。我々にも耳目を向けてよ～、と馬を恨みた  
くもなるけれど、いやいや、かほど愛しい馬たちと共  
に活動できる、これ以上の幸せがあるとは思えない。

馬のために、と思いつつ、しかし、実は馬のお蔭で  
満10歳を迎えた当会の活動。当初80名ほどだった会  
員も、今や300名に届く勢いで、北海道は勿論、南は  
沖縄に至る全国、いやいや、フランスにも会員さんが  
いて、だから、この人々の期待に応えるべく、今後も  
益々活動をパワーアップ。馬文化を、馬の歴史を、ば  
んえい競馬を世に知らしめ、将来に繋げようと、いや  
いや、これは私だけではなく、役員もスタッフも、み  
んなみんなが抱く大なる夢。

勿論、この夢に向かう相棒は、わが愛すべき馬たち。  
馬たちと歩む夢への道のりであって…。どうです、羨  
ましいでしょ？ 大なる夢を、皆様、ご一緒に追っ  
てみませんか。

# 馬事資料

## オリンピック級競技用馬の品種と変遷 (2) 馬場馬術競技馬について

池田 収



池田 収 (いけだ おさむ)

1941年3月佐賀県生まれ。1967年東京農工大学大学院農学研究科(修士課程)を終了、同年4月農林省(現農林水産省)入省(農業経済職)。本省各局庁、経済企画庁、国土庁等で勤務し1997年4月統計情報部企画調整課長を退職。関係団体勤務を経て2007年同法人の解散に伴い清算して現在に至る。学部生時代馬術部に所属。

Transitions in Species of Horse Used  
in Olympic-level Competition (2)

Dressage Horses

Osamu IKEDA

### はじめに

前回の障害馬術競技馬に続き、まず馬場馬術競技メダル馬の品種とその変遷について紹介したい。馬場馬術競技では、連続してメダルを獲得する人馬が多い。ダイナミックな障害馬術競技に比べて、調教過程を演目とする馬場馬術競技では、馬とライダー、トレーナー・コーチによる調教の完成度、審査員の主観的判断などが、競技成績を左右しやすいからである。

### 1. 馬場馬術競技においても緩やかに品種交代

(1) 圧倒的な強さの中で品種の消長を窺わせるドイツ中間種

オリンピック馬場馬術競技は、1912年ストックホルム大会から採用されているが、次の1920年アントワープ大会までの2大会では、演目にパッサージュ(Passage)とピアッフエ(Piaffe)は含まれず、他方で高さ1.1mの障害5個と騎乗者に向かって転がる着色された円筒の飛越を含み、かつ、片手綱の場合にはボーナスが加点される、というもので、今日の演目とは大いに異なっていた。騎兵の戦場での手綱さばきをイメージした競技種目だったようだ。

次の1924年パリ大会で、初めて20×60mの方形馬場で演技審査を実施することとなった。また、この大会から国際馬術連盟(FEI)の下で競技が行われることとなった。

#### ①ハノーバー

ハノーバー(Hannoverian)は、馬場馬術競技(個人)で最も多くメダルを獲得した品種である(図1)。1912~2016年間の24大会(個人メダル総数72個)で、金6個、銀4個、銅7個であり、障害馬術競技での金、

銀、銅各1個に比べても馬場馬術競技馬として選好され実績を挙げてきた。

最初は、1928年アムステルダムでのカール・フリードリッヒ・フライヘル・フォン・ランゲン(独)騎乗のDraufgänger(SEX不詳)であった。そして近年の金メダルは2004年アテネと2008年北京(香港)であり、アンキー・ヴァン・グルンスヴェン(女、蘭)がIPS Salinero(騏)に騎乗して連続して獲得した。



図1. 佐渡一毅選手とホワイミー号(ハノーバー): JRA所属

また、イザベル・ベルト（女，独）はGigolo（駟）に騎乗し、1992年バロセロナで銀、1996年アトランタで金、2000年シドニーで銀と3大会連続して個人メダルを獲得という快挙を成し遂げた。

この品種については、障害馬術競技の中でも触れたので、重複を避けて補足すれば本種の基礎となったホルスタインの種雄馬は青毛だったという。歩様は直線的かつ正確で力強く、それでいて柔軟性があり、膝がふたつくことはほとんどなく歩幅も広い、と評価されている。品種の選抜に際しては、基準化された能力検定のほか馬の気質も対象という。

## ②オルデンプルグ

オルデンプルグ（Oldenburg）は、これまでに馬場馬術競技（個人）で金メダル1個、銀メダル4個を獲得した。障害馬術競技（個人）では銅メダル1個だけなので、やはり馬場馬術競技馬としての活躍が目立つが、ここ20年来のメダル獲得実績からすると品種改良は続けられているものといえよう。

本種は、前述のアンキー・ヴァン・グルンスヴェン（女，蘭）がBonfire（駟）に騎乗し、1996年アトランタで銀、2000年シドニーで金メダルに輝いた。なお、同女史は乗馬をBonfireからIPS Salineroに代えて銀、金、金と連続4大会メダルに輝いた。2016年リオでは、イザベル・ベルト（女，独）がWeihegold OLD（♂）に騎乗して銀メダルを獲得した。

この品種は、ドイツ中間種の中で最も重いとされ1600年代に作出された。オルデンプルグのアントン・グンター伯爵の努力が大きく、種雄馬クラニッヒとフリージアンを基礎に育種を行った。第二次大戦後スポーツ馬としての特性を強めるためサラブレッドやノルマンの血を導入した。1952年ヘルシンキと1956年ストックホルムでリズ・ハーテル（女，デンマーク）が騎乗して銀メダルを獲得したJubilee（♂）はサラブレッドを父馬とした交配種であった。リズ・ハーテルは、小児麻痺を克服しつつ女性としての初参加から2大会連続メダル獲得という偉業を成し遂げた。

## ③ウェストファーリアン

ウェストファーリアン（Westfalian）は、戦後期から1990年代初期にかけて、金3個、銀2個、銅2個とメダル7個を獲得した。障害馬術競技（個人）ではメダル獲得実績がないことから馬場馬術競技用馬として好まれていることがわかる。

最近では1988年ソウルと1992年バロセロナの大会でニコル・ウプホフ（Nicole Uphoff女，独）がRembrandt（駟）に騎乗して金メダルを2大会連続して獲得した。

本種は、ドイツ西部地域ウェストファーリア地域で作出された温血種である。ワーレンドルフにある州立種馬牧場で管理している。第二次大戦後は、他のドイツ温血種と同じ基準で繁殖されているようだ。ハノーバーがセルの種馬牧場で作出され関係が深いこともあって、このウェストファーリアンは事実上ウェストファーリア地域で生産されたハノーバーであるとの見方もある。

## ④その他の中間種

トラケーネン（Trakehner）は、第二次大戦前から1972年ミュンヘン大会にかけて、金3個、銀4個のメダルを獲得したが、その後はメダルに届いていない。障害馬術競技での銀メダル2個に比べると馬場馬術競技馬として選ばれてきたといえる。

ドイツは、1920年と1924年の両オリンピックには参加が認められなかったが、1936年ベルリン大会でハインツ・ポーライ（独）騎乗のKronos（駟）が金メダルを獲得し、フリードリッヒ・ゲルハルト（独）騎乗のAbsinth（駟）が銀メダルを獲得した。ドイツ馬場馬術は、この大会で個人の金と銀のメダル、団体での金メダルを獲得し、フランスとスウェーデンに並ぶ強豪国となった。

オットー・ローク（1879-1957）は、その出場馬KronosとAbsinthを調教したマイスターで近代馬場馬術の祖ともいわれ、その弟子ウィリ・シュルタイス（1922-1995）とともに20世紀のドイツ馬場馬術界に大きな影響を及ぼした。

その他の品種としてはホルスタイン（Holstein）がいる。1988年ソウルでマルギット・オットー・クレパン（女，仏）がCorlandus（♂）に騎乗して銀メダルを、また、それ以前に1972年ミュンヘンでジョセフ・ネッカーマンがBenetia（♀）に騎乗して得た銅メダルがあるが、障害馬術競技（個人）での金2個、銀1個、銅1個に比べると少ない。なお、馬場馬術競技（個人）でのフランスのメダル獲得は、このとき以降はみられない（表1）。

### (2) 直近の2大会で躍進したオランダ温血種

オランダ温血種 (Dutch Warmblood (KWPN)) については、障害馬術競技での目覚ましい活躍を紹介したところだが、やや遅れはしたが2012年ロンドン大会と2016年リオ大会で大きく躍進し、今日では最も成功した馬場馬術競技馬の一つに挙げられている。2012年と2016年の連続した金メダルはシャーロット・ドユジャルダン (女, 英) が Valegro (騮) に騎乗し獲得した。また2012年の場合は、銀メダルのアデリンデ・コルネリセン (女, 蘭) が騎乗した Parzival (♂) と合わせて2頭ともオランダ温血種であった。

1984年ロサンゼルスでオットー・ホーファー (スイス) が Limandus (騮) で銅メダルを得たのが馬場馬術競技での初めてのメダルで、むしろ障害馬術競技でのメダルよりも早かった。21世紀に入る頃から国際競技水準のグランプリ馬として期待される遺伝的形質を求めて本種の育種がより専門化しているといわれているが、馬場馬術競技でも多くのメダル馬が誕生していることからみて育種面での効果もでてきたといえよう。

なお、本種のオリンピックでのメダル (個人) は、馬場馬術競技で金2個、銀1個、銅1個で、障害馬術競技では金3個、銀3個、銅2個と後者が多い。

また、英国の馬場馬術競技での金メダルは、2012年ロンドンでの個人、団体が初めてであった。さらに言えばドイツ中間種が個人で金メダルを獲得できなかったのは、1972年ミュンヘン大会でのリセロット・リンセンホフ (女, 独) がスウェーデン温血種である Piaff (♂) で金メダルを獲得したとき以来のことであった。

### (3) 域内産馬で一時代を築いたソ連 (ロシア)

セルゲイ・フィラトフ (ソ, 1926-1997) は、珍しい品種 (アハルテケ Akhal Teke) の Absent (♂) に騎乗し1960年ローマで金メダル、1964年東京で銅メダルと連続メダルに輝いた。さらに、1968年メキシコでは、イワン・カリタが騎乗して4位だったという。

このアハルテケという馬は、世界で最も特色ある、古く珍しい品種であり、トルクメン砂漠のオアシス周辺にて3,000年前に育種されたという。印象的な毛色は金、光沢のある河原毛が有名である。

騎手のセルゲイは、1956年ストックホルムから1964年東京までの3大会に出場したソ連の馬場馬術界の第一人者である。軍隊勤務中の27歳のときに競技用馬で

訓練し、1954年にソ連邦内で初めてタイトルを得た。

上官のセミヨン・ブジョーンヌイ元帥は第一騎兵軍の指揮官で熱心な馬術家、育種家でもあった。1952年の大会に出場したソ連代表の結果を恥じて、自己の指揮下にある連隊内にフィラトフら兵士を対象に乗馬学校を創設した。その成果は、以上のように比較的早く現れ始めた。

次の1968年メキシコではイワン・キミゾフ (ソ) が Ikhor (ウクライナ種でSEX不詳) に騎乗し金メダルを獲得した。さらに1972年エレナ・ペチュシュコワ (女, ソ) が Pepel (ロシアトラケネン, ♂) に騎乗して銀メダルを獲得した。ソ連は、団体でも1964年銅、1968年銀、1972年金メダルを得た。

また1980年モスクワ大会ではユリー・コフショフ (ソ) が Igrok (ウクライナ種, ♂) で銀メダル、ピクトール・ウグルモフ (ソ) が Shkval (ウクライナ種, ♂) で銅メダルを、また、同時に団体に金メダルを獲得した。モスクワ大会は主要西側諸国がボイコットしたが、この時期のソ連の馬場馬術競技の実力は明らかに最高レベルに達していた。

ソ連は、1960年ローマから1980年モスクワまでの6大会の馬場馬術競技において個人で金2個、銀2個、銅2個、また団体に金2個、銀1個、銅1個のメダルを獲得し一時代を築いた。ここで活躍したウクライナ種について言えば、第二次大戦後、スポーツ馬として改良したものであり、サラブレッドなどの軽種のほか、大戦後確保したトラケネンなどドイツ中間種の種雄馬とも交配させ能力強化を図ったものとみられる。

### (4) 1960年代以降、メダルが遠のいているサラブレッドとアングロ・アラブ

#### ①サラブレッド

サラブレッド (Thoroughbred) は、1932年ロス大会で、ザビエル・ルサーージュ (仏) が Taine (♂) に騎乗して金メダルを獲得した。また同じ大会でハイラム・タトル (米) が、その名も Olympic (♂) に騎乗し銅メダルを得た。米国初めての個人メダルであった。1948年ロンドン大会には、日本とドイツは招待されなかった。大戦後間もないということで馬場馬術競技は9カ国19選手のみが参加した。審査員は3人、馬場馬術競技の演目から、オリンピック大会初期のようにパッサーージュとピアッフエが外された。試合の結果は、ハンス・

表 1. オリンピック馬場馬術競技 (個人) でメダルを獲得した馬の品種の推移

	オランダ温血種 Dutch Warmblood		ハンノーバー Hanoverian		オルデンブルグ Oldenburg		ウエスト ファリアン Westfalian		ラトビアン Latvian		スウェーデン 温血種 Swedish Warmblood		ホルスタイン Holstein		トラケーネン Trakehner		アハルテケと ウクライナ種 Akhal-Teke & Ukrainian UKR		カラブレッド Thoroughbred		アングロ・アラブ Anglo-Arabian		その他 DK : DanishWB				
	金	銀	銅	金	銀	銅	金	銀	銅	金	銀	銅	金	銀	銅	金	銀	銅	金	銀	銅	金	銀	銅	金	銀	銅
1912年/ストックホルム																											
1920年/アントワープ												○															♀
1924年/パリ																											n.a.
1928年/アムステルダム				○																							n.a.
1932年/ロサンゼルス																											n.a.
1936年/ベルリン																											
1948年/ロンドン																											
1952年/ヘルシンキ																											
1956年/ストックホルム																											
1960年/ローマ																											
1964年/東京																											
1968年/メキシコ																											
1972年/ミュンヘン																											
1976年/モントリオール																											
1980年/モスクワ																											
1984年/ロサンゼルス																											
1988年/ソウル																											
1992年/バルセロナ																											
1996年/アトランタ																											
2000年/シドニー																											
2004年/アテネ																											
2008年/香港 (北京)																											
2012年/ロンドン																											
2016年/リオデジャネイロ																											DK ♂

資料 : (1) the Sport Horse Show and Breed Database : <http://www.sporthorse-data.com/dp/>=

(2) Pedigree Online All Breed Database : <http://www.allbreedpedigree.com/>

(3) HORSETELEX : <http://www.HorseTelex.com>

(4) Wikipedia the free encyclopedia 多数 : <https://en.wikipedia.org/>

注 : (1) 1900年は馬場馬術競技なし。1904-1908年は馬術競技不採用。1940-1944年はオリンピック開催せず。  
1956年のメルボルン大会は馬術競技のみ香港。  
(2) セルの○番号はSEX不詳。①カラブレッドとオルデンブルグの交配種♂。②アングロアラブの♂トウエストラレンの♀の交配種♂。  
(3) 表中の灰色は、同一人馬である。1992-2000年のみは3大会連続。他は2大会連続である。  
(4) ♂のう去勢が明示されたもののみ♂と表示した。

モーザー（スイス）がサラブレッドの Hummer（SEX 不詳）に騎乗し金メダルを獲得した。

次が1956年ストックホルムで、ヘンリー・サン・シール（瑞）が、サラブレッドの Juli（♂）に騎乗し金メダルを獲得した。

このようにサラブレッドは、1932年ロサンゼルスから1956年ストックホルムにかけて個人で金3個、銅1個のメダルを獲得した。馬種別メダルは必ずしも少ないわけではない。また、サラブレッドの馬場馬術競技での活躍に比べ、障害馬術競技では余り話題にならなかった気がする。障害馬術競技では、1968年から1992年にかけて金2個、銀2個（うち1個は1932年）、銅2個と米国選手が騎乗し獲得した。

以上のような情報・知識を、はっきり承知していたわけではないが1964年東京大会当時の学生にとって、サラブレッドで馬場馬術の練習ができることは願ってほしいことと思えた。

## ②アングロ・アラブ

1928年アムステルダム大会でシャルル・マリオン（仏）は、Linon（♀）に騎乗して、アングロ・アラブ（Anglo Arabian）で初めてとなる銀メダルを獲得した。次の1932年ロス大会でも同じ人馬の組み合わせで2度目の銀メダルに輝いた。

そして戦後の1948年ロンドン大会でアンドレ・ジュソーム（仏）が Harpagon（♂）に騎乗し銀メダル、続く1952年ヘルシンキでは同じ人馬で、今度は銅メダルを得た。なお、障害馬術競技では1952年と1980年で金メダル2個を獲得した。

## (5) 北欧とスウェーデン温血種、ラトビアンその他種

### ①スウェーデン温血種

スウェーデンは、1912年オリンピック大会招致に際して、熱心に馬場馬術競技の導入を働きかけた国であった。この大会で馬場馬術、障害馬術、総合馬術の3競技が一応揃うことになった。馬場馬術競技には8カ国、21選手が参加した。

スウェーデンの馬場馬術は、1912、1920、1924年の3大会で圧倒的な強さを誇り、24年の銅メダルを除く8個の個人メダルを得た（3大会とも団体戦はない）。この3大会でスウェーデン選手が獲得したメダルは、スウェーデン温血種（Swedish warmblood）に騎乗して金2個、銀と銅をそれぞれ1個、また、トラケーネン

に騎乗して金1個、銀2個を、その他の馬種で銅1個だった。

1928年以降は、ドイツとフランスがスウェーデンを凌駕する勢いとなり、第二次大戦後再開された競技でのライバル関係に持ち越される。1948年ロンドン大会でグスタフ・アドルフ・ボルテンシュテルン Jr.（瑞）がスウェーデン温血種の Trumf（♂）に騎乗して銅メダルを得た。

次の1952年ヘルシンキでは、ヘンリー・サン・シール（瑞、1902-1979）がスウェーデン温血種の Master Rufus（♂）に騎乗し金メダルを獲得し、次の1956年大会ストックホルムでは、前述のようにサラブレッドの Juli（♂）で金メダルを得た。同国は1952年と1956年両大会で団体金メダルも獲得した。

なお、1956年ストックホルム大会はスキャンダルに巻き込まれた。ドイツとスウェーデンの審査員が自国の選手をえこひいきにすることが問題となり国際馬術連盟（FEI）が仲裁して、IOCまで持ち上がり、一時は馬場馬術競技をオリンピックから除外することも検討されたが、次の1960年ローマでは、個人戦のみ、かつ、一国枠は2人までとの条件で存続が認められた。この時を契機としてスウェーデンチームは、馬場馬術競技の成績ではドイツの後塵を拝することとなった。

スウェーデン温血種は、その後1960年ローマで銀メダル、1972年ミュンヘンで金メダル、1988年ソウルで銅メダルを得るが、いずれも他国の選手の騎乗馬だった。

### ②ラトビアン

ウラ・ザルツゲーベル（女、独）は、Rusty♂に騎乗し2000年シドニー銅メダル、2004年アテネで銀メダルを獲得した。同時に団体でも2個の金メダル、他に世界選手権などでも数々のメダルを得た。この馬はラトビア産の体高180cmの大柄な馬であった。父系の祖父馬はサラブレッド、また父母双方にハノーバーやロシア産トラケーネンの血統を持つ。

本種（Latvian breed）は、1856年に遡るが、この時期から西欧の馬と在来馬との交配が進められ、ハノーバーとオルデンブルグをベースにしながらもホルスタインなどとも交配させ、さらに大戦後はサラブレッド、アラブなどの軽種も加えスポーツ馬を作出したといわれている。

## 2. 馬場馬術伝統国のメダルと品種の統計的概要

### (1) 国別メダルの推移

オリンピック大会を戦前期と戦後の前期と後期に3区分して、馬場馬術競技メダル数をみると、各国の実力は一目で判断できる。ドイツ（戦前、戦後を通じて国名は変わるが、便宜上ドイツと表示した。）は、通期の団体20大会（うち1920, 1924, 1948年招待されず、1980年モスクワ大会ボイコット）で金13個、銀3個、銅1個、また個人でも、通期の24大会で金7個、銀9個、銅9個と圧倒的な強さをみせる（表2）。

次に近年急速にメダル獲得に成果を挙げてきた英国とオランダが注目される。

また個人と団体戦で着実に成果を挙げてきたスイス、

団体戦で銀メダル1個と銅メダル7個を獲得している米国、かつてドイツと二分する伝統的な馬術王国だったフランス、多くのメダルを獲得してきたスウェーデンやロシア（ソ連）の巻き返しがなるのかも注目される。

### (2) 品種別メダル馬の推移

過去100年余の間に24回開催されたオリンピック馬場馬術競技（個人）のメダル馬につき、品種の変遷を統計的に整理すれば、次のような特徴がみられる（表3）。

1つは、全期を通じてドイツ中間種が過半（53%）のメダルを占めており、特に後期（1984-2016）は27個のうち18個と3分の2に達していることである。ドイツ中間種の品種別（全期）ではハノーバーの17個、

表2. オリンピック馬場馬術競技の国別時期別メダル数の推移

国名	種目	戦前期と戦後前後期のメダル数（個）											
		1912-1936			1948-1980			1984-2016			1912-2016		
		金	銀	銅	金	銀	銅	金	銀	銅	金	銀	銅
スウェーデン	個人	3	3	3	2		1				5	3	4
	団体		2	1	2		1			1	2	2	3
フランス	個人	1	2	1		1	1		1		1	4	2
	団体	1	1		1						2	1	
ドイツ	個人	2	1		1	3	5	4	5	4	7	9	9
	団体	2			3	2	1	8	1		13	3	1
米国	個人			1									1
	団体			1		1	1			5		1	7
デンマーク	個人					2			1			3	
	団体									1			1
ソ連・ロシア	個人				2	2	2				2	2	2
	団体				2	1	1				2	1	1
オランダ	個人							3	2	1	3	2	1
	団体			1					4	1		4	2
英国	個人							2		1	2		1
	団体							1	1		1	1	
スイス	個人				3	1				2	3	1	2
	団体					3	2		2			5	2
その他	個人			1	1					1	1		2
	団体					1	2		1	1		2	3
総計	個人	6	6	6	9	9	9	9	9	9	24	24	24
	団体	3	3	3	8	8	8	9	9	9	20	20	20

資料：List\_of\_Olympic\_medalists\_in\_equestrian (<https://en.wikipedia.org/wiki/>) から作成した。

注：団体は、1928年から。また1960年は実施していない。したがって全期では4回少ない。

表3. オリンピック馬場馬術競技の品種別時期別メダル数（個人）の推移

(単位：個)

	前期			中期			後期			全期		
	1912-1936			1948-1980			1984-2016			1912-2016		
	金	銀	銅	金	銀	銅	金	銀	銅	金	銀	銅
ハノーバー (HAN)	1			2	1	3	3	3	4	6	4	7
ウェストファーリアン (WEST)					2	1	3		1	3	2	2
オルデンプルグ (OLD)					2		1	2		1	4	
ホルスタイン (HOL)						1		1			1	1
トラケーネン (TRK)	2	3		1	1					3	4	
ドイツ中間種計	3	3		3	6	5	7	6	5	13	15	10
オランダ温血種 (KWPN)							2	1	1	2	1	1
デンマーク温血種 (DWB)								1	1		1	1
スウェーデン温血種 (SWB)	2	1	1	2	1	1			1	4	2	3
ラトビアン (LAT)								1	1		1	1
サラブレッド (TB)	1		1	2						3		1
アングロ・アラブ (AA)		2			1	1					3	1
アハルテケ (ATK)				1		1				1		1
ウクライナ (UKR)				1	1	1				1	1	1
不明			4									4
総計	6	6	6	9	9	9	9	9	9	24	24	24

資料：(1) List of Olympic medalists in questrian (<https://en.wikipedia.org/wiki/>)(2) The Sport Horse Show and Breed Database (<https://www.sporhorse-data.com/>)

ウェストファーリアン（中・後期）とトラケーネン（前期中心）の7個、オルデンプルグの5個の順に多い。前述のように、このウェストファーリアンは、事実上ウェストファーリア地域で生産されたハノーバーであるとの見方もあり、遺伝形質上からくる従順な気質、歩様、乗り心地などで馬場馬術馬として好まれるのであろう。

2つには、オランダ温血種が直近2大会で金2個、銀1個のメダルを獲得したことである。これも既述のように21世紀に入る頃から国際競技水準のグランプリ馬として期待される遺伝的形質を求めて本種の育種がより専門化してきた成果ではないかとみられる。

3つには、ドイツ中間種のトラケーネン、スウェーデン温血種、サラブレッド、ウクライナなど戦前や大戦後の初期（前中期）に活躍した品種がここ30年近く振るわないことである。これは、スウェーデン、フランス、ソ連（ロシア）など、かつての馬場馬術競技強豪国の不振とも関係がありそうである。

### 3. ドイツ馬場馬術の伝統継承事例

オリンピック馬場馬術競技におけるメダリストをみると、ドイツ人騎手とその騎乗馬のドイツ中間種が圧倒している。それも、戦後しばらく経った1960年代以降強まってきている。英国の馬事関係の作家で馬術家でもあるエルウィン・ハートリー・エドワーズは、その著書で「1956年以降、ドイツが世界レベルの競技会の最前線に躍り出てこの競技の主導権を握り、判定基準だけでなく、馬のタイプにまで影響を及ぼすようになった。」（後掲『新アルティメイトブック馬』）と述べている。

ドイツ馬場馬術の伝統継承から強さの秘密を探ってみたい。

#### (1) 第一次大戦の敗北と馬術再生

ドイツは、オリンピックで初めて馬場馬術競技が実施された1912年ストックホルム大会参加の後、1920年と1924年の大会は第一次大戦敗戦の影響で招待されず、オリンピックに大きな空白期があった。16年後の

1928年（馬場馬術競技4回目）アムステルダム大会では、念願のメダル、それも、個人と団体の金メダル2個を獲得した。

その立役者である前述のカール・フリードリッヒ・フライヘル・フォン・ランゲン伯（1887-1934）は、馬術家としての活躍が期待されながら戦間期に、競技中の事故で亡くなった。彼自身は、ドイツ馬術界の先輩で“Gymnasium des Pferdes”（英訳“High School of the Horse”）の著者であるグスタフ・シュタインブレヒト（Gustav Steinbrecht, 1808-1885）とフランスの馬術家ジェームス・フィリス（James Fillis, 1834-1913）から学ぶ姿勢だったようだ。

1924年の大会からプロフェッショナル（職業として馬事にかかわって報酬・収入を得ている者）は、オリンピック出場から排除されており、専ら裏方である馬のトレーナー（調教師）やコーチ（指導者）に徹していくが、特に馬場馬術競技においてはその成績を大きく左右する存在であった。

この時期のトレーナーであるオスカー・マリア・ステンズベック（Oskar Maria Stensbeck, 1858-1939）は、東プロイセンの温血種 Gimpel（1928年大会でヘルマン・リンケンバッハが騎乗し個人6位、1936年ベルリン大会ではヘルマン・フォン・オッペルン＝プロニコフスキーが騎乗し各々団体金メダル獲得に貢献）を調教し勝利に貢献した。

次に、少し若い世代であるが第一次、第二次大戦の戦間期と戦後にかけてドイツ馬術界を再建・再興させた人物について足跡をみよう。

## (2) 両大戦の戦間期と戦後復興期を支えた オットー・ローク

オットー・ローク（Otto Lörke, 1879-1957）は、両大戦の戦間期のドイツ馬場馬術界をトレーナー・コーチとして支えた。若い頃プロシャ陸軍のガドー槍騎兵連隊に所属、後に皇帝ヴィルヘルム2世のお召し馬を調教してキャリアを積む。第一次大戦後ベルリンに馬術厩舎を設立し、ここでグランプリ級の馬場馬術競技馬を多数調教した。近代馬場馬術の祖ともいわれる。

1936年ベルリン大会での金メダル馬 Kronos（驥）、同銀メダル馬 Absinthe（驥）を調教した。第二次大戦中、陸軍乗馬駆動学校厩舎長を務めつつ調教した Fanal（1934-1959, 驥, 自己所有）は、戦中・戦後期のドイ

ツ馬場馬術の基準馬となり、長寿だったことから戦後、多数のドイツオリンピック選手を育てた。

戦後、オットー・ロークは、ワーデンドルフのフォルンフォルツ厩舎で調教と指導を行う。大戦後初めて開かれた1948年ロンドン大会には、ドイツは日本と共に招待されなかった。1952年ヘルシンキ大会は、個人ではメダルに届かなかったものの団体銅メダルを獲得した。オットー・ロークは、一番弟子のウィリ・シュルタイスと共に、多数のグランプリ馬を調教しオリンピック選手を訓練した。

1952年大会で団体銅メダルを得た人馬の個人成績は、ハインツ・ポーライ（1936年ベルリンで金）が Adular に騎乗して7位、イーダ・フォン・ナーゲル（ドイツ初の女性騎手）が Afrika に騎乗して10位（いずれもオットー・ローク調教の WEST）、フリッツ・ティーデマンが Chronist に騎乗して6位（ウィリ・シュルタイス調教の TB）であった。

次の1956年大会では、団体銀メダル、そして個人では、リセロット・リンセンホッフが Adular に騎乗して銅メダルを獲得、アンネリーゼ・キュッパースが Afrika に騎乗して14位だった。またハンネローレ・ウエーガンが Perkunos に騎乗して9位（ウィリ・シュルタイス調教の TRK）だった。

このように1956年ヘルシンキ大会のドイツチームは、ロークの弟子の女性ライダー3人で編成されていたが成果を挙げた。この翌年、ロークは旅行中に亡くなった。戦前からオリンピックに関わってきたプロトレーナーの時代が終わった（図2）。

## (3) 1960～70年代ドイツ代表チームのトレーナーとライダー

オットー・ローク亡き後の1960～70年代は、ロークの後継者であるプロのトレーナー・コーチとアマのライダー・トレーナーが競争的協調を果たす過渡期であったといえるが、団体戦を重視するドイツ馬術界は不動の成績を残していく。

ここで取り上げる代表例は、プロのトレーナーでありコーチ（①）、オリンピック出場のライダー・トレーナー（②と④）、オリンピック出場のライダー・トレーナーでコーチ（③）である。

### ①ウィリ・シュルタイス—ロークの後継者—

オットー・ロークが亡くなった3年後に1960年

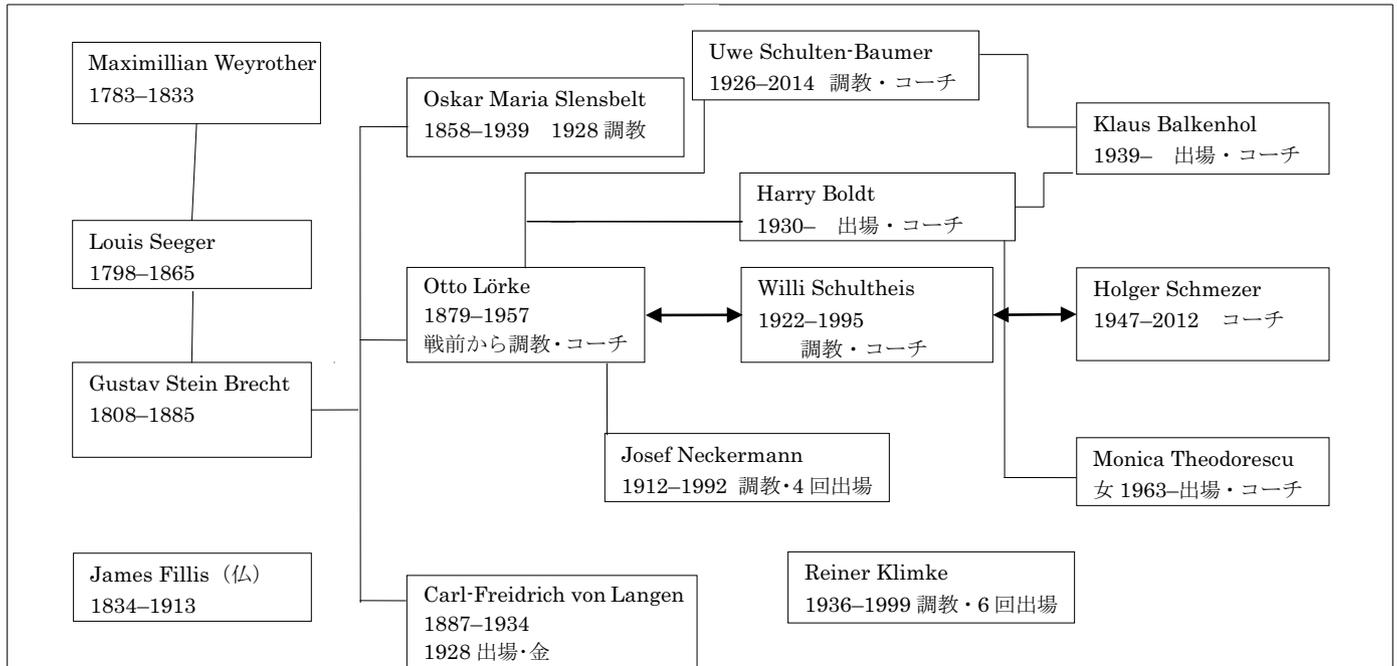


図2. オリンピックにおけるドイツ馬場馬術の伝統継承とトレーナー・コーチ

ローマ大会を迎えるのだが、ドイツ代表のコーチはロークの一番弟子であるウィリ・シュルタイス (Willi Schultheis, 1922-1995) が務めた。

ウィリ・シュルタイスは、8歳から乗馬を学ぶ。父親と同じ騎手を志望したが体重超過のため断念、1936~1940年の4年間、ロークの下で1936年オリンピック金メダル馬 Kronos に騎乗して学ぶ。戦後もワレンドルフのフォルンフォルツ厩舎でオットー・ロークと行動をとっていたが、1954年にデュッセルドルフ厩舎を立上げ経営し、ロークと別れた。

前にも触れたが1956年ストックホルム大会は馬場馬術競技の審査を巡りスキャンダルが生じ、その結果1960年ローマ大会は馬場馬術競技の団体戦は中止、個人も代表2人までと裁定された。ローマ大会では、ジョセフ・ネッカーマンが自己所有馬で銅メダル、ローズマリー・スプリングァー (女) がウィリ・シュルタイスの調教馬で7位だった。

この結果は前回大会と比べても遜色ない。団体競技があれば銀メダルが見込めるものであろう。しかし、ウィリ・シュルタイスは、大会後ドイツ代表チームのコーチを辞したようだ。1964年と1968年の両大会はカナダチームのコーチに就任しているからだ。1964年東京、1968年メキシコ、1972年ミュンヘンの3大会のドイツ代表チームのコーチは誰だったのか見当たらない。

その後、ウィリ・シュルタイスは、1974~1979年の5年間、再びドイツ馬場馬術代表チームのコーチに返り咲く。カナダチームのコーチとしての実績を評価されたからだといわれる。次に述べるジョセフ・ネッカーマンが4大会出場の後リタイヤしたことも就任させやすかったのかもしれない。

1976年モントリオール大会では、ドイツは団体金、個人はハリー・ボルトが銀、ライナー・クリムケが銅メダル、ガブリエラ・グリロが4位だった (次のモスクワ大会は西ドイツもボイコットに同調した)。

## ②ジョセフ・ネッカーマン—大富豪の馬術家—

ジョセフ・ネッカーマン (Josef Neckermann, 1912-1992) は、1938年からドイツに通販会社を創立し経営するユダヤ系の実業家である。数十年にわたり馬術家としても活躍しており、家族のための馬術厩舎を所有していた。

1974年オリンピック憲章から規程が削除されるまではアマチュアのみが出場資格を得たため、実業家として所有自馬を調教して出場、成果を収めた。古いフィルムにはロークと思われるトレーナーと訓練する姿も残されているが、会社経営の傍らローク亡き後4回もオリンピックに出場し実績を残した。ネッカーマンは、ウィリ・シュルタイスよりも年齢が10歳上であり社会的にも乗馬キャリアからみてもコーチを必要としな

かったのではないかとも思える。

ネッカーマン自身のオリンピック出場は、1960～1972年の馬場馬術4回で、団体は60年未実施の後、金、銀、個人は銅、5位、銀、銅メダルで、何れも自己所有馬での出場だったとみられる。

### ③ハリー・ボルト—メダリストのトレーナー・コーチの先駆け—

ハリー・ボルト (Harry Boldt, 1930-) は、東プロイセンで生まれた。父はプロのインストラクターで戦後クルップ家の馬の世話をしていたという。ボルトは、最初は障害馬術をしていたが、1950年、20世紀初めには珍しい高名な女流障害馬術家のケイト・フランケ (Käthe Franke, 1897-1976) に弟子入りし、その奨めで馬場馬術に進んだという。

オリンピック出場は、1964年 (団体金、個人銀メダル) と1976年 (団体銀、個人銀メダル) の2回で、自己所有馬での出場である。

ハリー・ボルトの競技生活は、1980年モスクワ大会のボイコットもあって、それ以降はみられず1981～1996の16年間、馬場馬術ドイツ代表チームのコーチに就任し、数多くの若手のオリンピック選手を育成して輝かしい成績を残すことになる。

### ④ライナー・クリムケ—オリンピックに6回出場し実績を残したドクター—

ライナー・クリムケ (Reiner Klimke, 1936-1999) は、オリンピックに6回出場した。

最初の1960年は総合競技 (Three-Day Event), その後の1964, 1968, 1976, 1984, 1988年の5回は馬場馬術競技で好成績 (団体は金5個、個人は6位、銅、銅、金、20位) を残した。国際馬術連盟馬場馬術委員会委員も務めた。クリムケは、同じライダー仲間のハリー・ボルトに兄事していた。また、馬術書も多数出版している。

ミュンスター在住で法律事務所を開業しており、ドクターの敬称付きで呼ばれている。ドクターは、家族のための馬術厩舎を所有していた。娘は総合馬術のオリンピック・メダリストである。また妻もグランプリライダーであり、トレーニングに協力した。ドクターのトレーニングはユニークで普通の馬を傑出した競技に強い馬に仕上げたという。ドクターの自馬で1968年メキシコ銅メダル馬 Dux が1969年に21歳で引退した後、1972年のミュンヘン大会は出場していないが、その間ハノーバーの Mehmed (1961年生、驕) を調教し

1976年大会に出場した。

### (4) 1980～90年代のハリー・ボルトとウーヴェ・シュルテン・バウマー (シニア)

ハリー・ボルトは、1984年ロスから1996年アトランタまでの4度のオリンピック馬場馬術のドイツ代表チームのコーチとして、団体の金4個、個人の金4個、銀1個、銅1個を獲得した。この時期は、アマ規定がはずされ、戦後生まれの若いライダーが出場し好成績を挙げたことでも注目される。コーチとしての実績は、ライダーやトレーナーとしての実績を上回るものがある、といえる。

また、ウーヴェ・シュルテン・バウマー (Uwe Schulten-Baumer (Senior), 1926-2014) は、ハリー・ボルトよりやや年上のプロのトレーナーで、同名の息子はオリンピック選手である。戦時中軍務に付き司令官の馬に乗り、戦後は障害馬術競技に出っていたが騙馬 Gambling に出合って馬場馬術に打ち込む。弟子は息子と娘のほか、ニコル・ウプホフにも Rembrandt の調教に一時関わったことで教えた。さらに、騎乗馬 Gigolo を調教したことでイザベル・ウェルチも弟子といえる。

次にボルトとウーヴェ・シュルテン・バウマーが指導した、60年代生まれの若手の代表的ライダー3人を紹介したい。

### ①女性初のドイツ代表チームコーチ—モニカ・セオドレスク

モニカ・セオドレスク (Monica Theodorescu, 女, 1963-) は、馬場馬術トレーナーの手ほどきを受けて乗馬が上達した。初期の大会出場馬は父が購入し娘に与えたものである。

オリンピックには1988, 1992, 1996年の3大会連続出場で団体連覇に貢献した。個人のオリンピック成績は、6, 17, 4位, であった。

こうした活躍から、ホルガー・シュメツァー (Holger Schmezer, 男, 1947-2012) ナショナルコーチが急死した後を受けて2012年の大会直前コーチに推挙され、ロンドン、リオの2大会でチームを指導した。現在は自家繁殖馬を調教する馬術厩舎を営んでいる。

### ②2回連続個人金メダルのニコル・ウプホフ

ニコル・ウプホフ (Nicole Uphoff, 女, 1967-) も、父が買い与え、グランプリ馬に調教された馬で馬場馬術を極め実績を残した。オリンピックは1988, 1992年

の2大会で団体、個人ともに金メダルを獲得した。

### ③イザベル・ウェルチ

イザベル・ウェルチ (Isabell Werth, 女, 1969-) は、生家の農場で5歳のときから馬に乗り始めた。17歳までは障害競技や総合競技をしていた。友人の父である、ウーヴェ・シュルテン・パウマー (前述) の馬に乗り馬場馬術に夢中になったという。

オリンピックには1992, 1996, 2000, 2008, 2016年と5回出場し団体で金5個, 個人で金1個 (1996年), 銀4個のメダルを獲得した。

### (5) 21世紀のドイツ代表チームのコーチと若干の課題

1996年の大会後ハリー・ボルトの後任の代表コーチにクラウス・バッケンホール (Klaus Balkenhol, 男, 1939-) が就任し2000年シドニー大会を指導した。その後ホルガー・シュメルツ (Holger Schmezer, 男, 1947-2012) が2001年から2012年の間, 就任したが2012年ロンドン大会前に急死した。その後任が, 先に述べた女性初のコーチ, モニカ・セオドレスクである。

コーチの任期が短い2000年シドニーから2016年リオまでの5回の成績をみると, 団体は金4回, 銀1回であるが, 個人では銀4個, 銅3個であり金メダルは取れていない。ここにドイツ馬場馬術における技術面での問題があるようにも思える。

この間, オランダが個人で金3個, 銀1個そして英国が個人で金2個, 銅1個を獲得した。また, 団体でも, 英国が金1個, 銀1個, オランダが銀2個, 銅3個, 米国が銅3個と成績を挙げてきた。

ドイツ馬場馬術界は, 近年こそ若干の課題を抱えつつも, 以上みてきたように伝統を継承した経験豊富な多数のトレーナーとライダーを輩出し, スポーツ馬としての能力を向上させ育種したドイツ中間種を専ら調教して, 団体戦重視で競技に臨み成果を挙げてきた。

後を追う英国, オランダ, 米国などもドイツ馬術から多大な影響を受けてきている。

### 結びに代えて

オリンピック級競技用馬の品種について筆者が調査してみようと思立った動機は, 日本の馬術競技は何故オリンピックで勝てないのだろうか, ということにあった。調査結果を踏まえ, 若干私見を述べさせていただきます。

- 第二次大戦後, 欧米ではスポーツ馬の能力向上のため育種に注力した。その成果は1980年代以降顕著にみられるが, 日本はスポーツ馬の育種を, 少なくとも組織的に実行することはなかった。
- オリンピック/世界選手権の馬術競技へ参加できる馬齢は, 障害馬術馬は9歳以上, 馬場馬術馬は8歳以上, 総合馬術馬は8歳になる歴年の初めから, と制限されている。雌馬の妊娠と出産, 子馬の育成, 若駒のトレーニング等を考えると長い年月と周到な準備を必要とする。そこで, 日本では, ある程度調教された外国産競技用馬に依存して4年ごとのオリンピックに臨みがちになってきた。
- こうした対応の仕方は, 明治以来の産業政策の伝統に沿うものではない。欧米にキャッチアップするとき日本は正面から受け止め国産化し新たな産業を育成してきた。大家畜をみても, 戦前の軍馬改良然り, 戦後も乳牛, 肉専用の黒毛和牛, 競走馬の品種改良に成果を挙げてきた。今後はスポーツ馬の育種を通じて新たな畜産業・馬事産業を育成し, 地域振興にも役立ててはどうか。
- 乗馬クラブ・大学等の乗馬施設の繋養馬約15,000頭の3分の1程度, 約5,000頭を品種改良した国産スポーツ馬と代替し, 多くの乗馬愛好家が普段から温血種・中間種に触れ合い, 騎乗する機会を提供してはどうか。引退後の競走馬の活用サイクルとして民間乗馬施設が重要な役割を果たしていることは理解できるが, ほとんどが競走馬上がりのサラブレッドという馬種構成では, 特に初心者には馴染まないのではないか。
- 上記のスポーツ馬の民間施設導入目標を10年程度で達成するためには, 当初の3年間を毎年300~350頭規模で輸入 (供給) することが必要 (その後は漸減可能) である。妊娠馬や種雄馬の輸入, 冷凍精液の輸入, 受精卵移植技術の開発等により改良増殖を, 関係する業界・組織・研究機関等の協力の下, 計画的に検討してはどうか。
- さらに国産スポーツ馬の育種, 子馬の育成, 生育段階に応じたトレーニングと能力テスト, 取引市場の形成, 馬齢に応じた競技会の開催と種馬の選抜が必要である。
- Dressage の訳語として「馬場馬術」が使用されているが, 周知のように, 本来は「調教」という意味で

ある。伝説の人である遊佐幸平氏（1883-1966）は、オリンピックの馬場馬術競技を「大調教競技」と表現しておられる（遊佐幸平『馬狂放談』昭和33年12月，那須書店）。やはり育成馬（2～3歳）から調教してこそ調教技術は保持・完結できる。その意味でも国産馬が望ましい。

- 国産スポーツ馬によるオリンピック馬術競技出場の時期であるが，馬齢制限の最も厳しい障害馬術競技でいえば妊娠期間を加えると着手してから10年先である。行程表に従い順調にスタートできたとしても2028年大会に一部でギリギリ間に合うかどうかである。1932年ロサンゼルス大会で西竹一中尉は障害馬術競技で金メダルを獲得した。その年から100周年に当たる2032年大会を国産馬によるメダル獲得の目標年次と定めてはどうか。名分・時宜ともに掲げる目標として相応しいと思えるのだが。

#### 主要参考文献・情報

1. Edwards, E.H. 著, 楠瀬 良 監訳『新アルティメイトブック馬』（緑書房, 2014年6月1日, 第2刷）
2. The Sport Horse Show and Breed Database : <http://www.sporhorse-data.com/d?!=>
3. Pedigree Online All Breed Database : <http://www.allbreedpedigree.com/>
4. HORSETELEX : <http://www.Horsetelelex.com>
5. Wikipedia, the free encyclopedia 多数 : <https://en.wikipedia.org/>
6. Fédération Equestre Internationale (FEI) | FEI.org : <https://www.fei.org/>
7. 柏村文郎：ヨーロッパにおけるスポーツホースの育種改良の現状. Hippophile 58, 18-25.
8. 国際馬術連盟「馬場馬術競技会規程（第25版）」（2016年1月1日改定）公益社団法人日本馬術連盟 訳.
9. 「日本馬術連盟競技会規程 第28版」（平成28年4月21日施行）.

## 特別記事

### 2016年ブリーダーズカップで 出会った忘れがたい人々 三浦暁子（写真：村田利之）



三浦暁子（みうら あきこ）  
エッセイスト。1956年生まれ。上智大学文学部史学科卒業。  
結婚後、文筆活動を開始する。  
文芸家協会会員、ウマ科学会評議委員、兵庫県のじぎく文  
芸賞選考委員、神戸新聞文芸エッセー部門選者。著書多数。

The Unforgettable People I Met  
at the 2016 Breeders' Cup  
Akiko MIURA (photo by Toshiyuki MURATA)

#### はじめに

これまでも何度か「今年こそは思い切ってアメリカの競馬を観に行こう」と、1人で決心してきた。フランスやイギリスの競馬場で観戦する幸運を得ながらも、なぜかアメリカには縁がなかったのだ。取材先で出会うアメリカ人はいつも不思議そうに言ったもの「どうして三浦さんはアメリカに来ないの？ アメリカの競馬を観ないで、競馬を理解したなんて思っただけだよ」と。確かに…。その通り…。だから、その度に答えたのだ。いつかはきっと。いつかは必ず。夢で終わらせたりはしませんから」と。

今回、その「いつか」が来たのは、再び幸運に恵まれたからだが、次の3つ出来事が重なったことが大きい。

まず、1つ目は、たくさんのレースがあるアメリカの競馬の中で一番行きたいと思っていたブリーダーズカップ（以下BC）を取材してはどうかと勧められたこと。2つ目は、そのBCが世界中のどこよりも行きたいと願っていたカリフォルニアのサンタアニタパーク競馬場で開催される年にあたったこと。3つ目は、日本で海外馬券の発売が始まり、日本馬ヌーヴォレコルトが挑戦すること。

この3つが重なるなんて、私にはまたとない機会に思えた。

チャンスを逃してはならない。家族の許しを得ると、私は、早速、荷造りを始めた。

#### 海外競馬発売元年のブリーダーズカップ

2016年は日本の競馬ファンにとって、画期的な年となった。とうとう海外競馬の発売が始まったからだ。

これまでは、海外競馬に日本馬が出走しても、現地に赴かない限りは応援するにとどまった。しかし、イ

ンターネット投票による発売が始まり、自ら馬券を買って参戦することができるようになったのだ。

その第1弾となったのが凱旋門賞。人気馬マカヒキが参戦したこともあり、待ちに待ったファンはこぞって馬券を購入した。

そのおかげだろう。日本での凱旋門賞の売り上げは、41億8,599万5,100円にのぼった。これは驚きの数字だ。現地フランスの売り上げをはるかに上回り、日本国内はもちろんのこと国際的にも話題となった。

その興奮も冷めやらぬ11月1日。オーストラリアのフレミントン競馬場でメルボルンカップが行われ、ここでも6億9,737万1,200円を売り上げた。凱旋門賞には及ばなかったけれど、日本の競馬ファンの熱さを示すものとなった。

そして、今回は11月5日アメリカの西海岸にあるサンタアニタパーク競馬場で行われるBCフィリー&メアターフに、日本馬ヌーヴォレコルトが参戦する。海外競馬元年にあたる年の3度目のレース。その経済効果も含め、今後はどうなっていくのだろうか。興味はつきない。

折も折、アメリカでは11月8日に大統領選が行われることになっており、新大統領が誕生する目前のタイミングだ。つまり、今年のBCは、オバマ大統領のもとで行われる最後のレースとなる。

選挙について、マスコミの論調は、民主党のヒラリー・クリントンがバラク・オバマのあとを継ぐのは間違いないというのがほとんどだった。共和党であり、さらには差別的な発言が目立つドナルド・トランプは惨敗するだろうという人が多かった。「どうなのでしょう？」と聞かれる度に、私は「予想できないですよ」と、答えてはいた。しかし、ヒラリー・クリントンが選挙

人を獲得した西海岸で行われる BC に行けば、現地の様子から、少しは予測できるかもしれない。何よりも、大統領選直前の BC は特別なものになるだろう。

私はワクワクしながら、ロサンゼルス行きの飛行機に乗った。

### ブリーダーズカップとは？

正式にはブリーダーズカップ・ワールド・サラブレッド・チャンピオンシップスと名付けられたレースである。アメリカが誇る競馬の祭典として知られ、文字通り、ブリーダーズ、つまり生産者の人々が開催する競馬だ（写真1, 2）。

賞金総額は2,800万ドル（約29億4,000万円）で、世界でも1, 2を誇る高額賞金を誇る。本年度は賞金総額を引き上げる試みも行われ、8着までに賞金を支払うように変更が加えられた。さらに、州外から出走馬を輸送する際には輸送費を補助するなど、出走馬関係者へのサービスにも力を入れたという。それもこれも、BC 人気を高めようとの情熱からだ。私はここにアメリカ流の歓待サービスを感じる。

ヨーロッパの競馬といえば、上流階級の人々の参加が多く、ドレスコードにも注意を払わなければならない。競馬場も、元々草原で馬を走らせることが発端だっ

たためか、ファンからすると観戦しにくい。向こう正面を直線で走り、スタートからゴールまで、ほとんど見えないレースさえある。けれども、アメリカの競馬は、あくまでも観客のための競馬だ。サーキットのように見やすい競馬場が作られ、最初からショーとして提供されるのだ。とりわけ、BC は185頭もの馬が出走登録され、そのうちなんと81頭がG1の勝ち馬だという。プログラムを開き、出走馬を見てみても、スターホースがきら星のように並び、まさに競馬のオールスター戦と呼びたくなる。



写真1. BC の各優勝馬に贈られる生花のレイ



写真2. 2016年ブリーダーズカップ サンタアニタパーク競馬場 芝コースのスタート

さらに、バラエティに富んだG1競争が行われることにも驚かされる。レースは多種多様で、ターフ、ダートの両方の競走が行われることはもちろんのこと、距離も6.5ハロン(約1,300メートル)から12ハロン(約2,400メートル)まで長短様々。これはまるで高松宮記念とオークスがたて続け様に1日のうちに行われるようなものではないか。

さらに、開催競馬場が持ち回り制となっていることも興味深い。今年2016年は、前にも述べたように、カリフォルニア州にあるサンタアニタパーク競馬場で開催されるが、これまでキーンランド(2015年)、チャーチルダウンズ(2010, 2011年)、モンパspark(2007年)など、実に多くの競馬場で華やかなレースが行われてきた。移動遊園地のように、競馬そのものが移動していくのだ。

2017年はサンタアニタパークではなく、同じカリフォルニア州ではあるが、デルマー競馬場で行われることがすでに決まっている。サンタアニタパークでのBCにこだわる私としては、「今年こそは行っておかねば!」という思いになる。こうした「レアもの感」をくすぐる方法は、ファン心理というものを理解してこそだと感心しないではいられない。

今やアメリカ競馬の一大イベントとして世界にその名をとどろかせるBCだが、元々は人気は下降気味の競馬を復活させようという目的で作られたという。1984年、ブリーダーであるジョン・ゲインズが、競馬の楽しみをどうしたら人々に伝えられるか考えて創設したのがBCだ。レースの種類が豊富なことがBCの魅



写真3. BCクラシックに勝利し、花のレイをちぎって投げるマイク・スミス騎手

力だが、あまりの多さに戸惑うこともある。G1が次々と行われるのは、私たちにはなじみがないからだ。

今年、11月4日と5日の2日にわたって行われる祭典の概要を簡単にまとめてみると、以下のようなになる。

まず1日目は、4つのG1が行われる。

- ・BCジュヴェナイルターフ(2歳牡馬 芝 8f)
- ・BCダートマイル(3歳以上 ダート 8f)
- ・BCジュヴェナイルフィリーズターフ(2歳牝馬 芝 8f)
- ・BCディスタフ(3歳以上牝馬 ダート)

続く2日目は、

- ・BCジュヴェナイルフィリーズ(2歳牝馬 ダート 8.5f)
- ・BCフィリー&メアターフ G1 3歳以上牝馬 芝 10f
- ・BCフィリー&メアスプリント G1 3歳以上牝馬 ダート 7f
- ・BCターフスプリント G1 3歳以上 芝 6.5f
- ・BCジュヴェナイル G1 2歳牡馬 芝 8.5f
- ・BCターフ G1 3歳以上 芝 12f
- ・BCスプリント G1 3歳以上 ダート 6f
- ・BCマイル G1 3歳以上 芝 8f
- ・BCクラシック G1(写真3)

このような大レースが繰り返されるのだから、本当に息つく暇もない。日本から参戦するヌーヴォレコルトは、2日目のBCフィリー&メアターフに出走する。

ヌーヴォレコルトに騎乗する武豊騎手は、若き日々サンタアニタパーク競馬場を拠点に武者修行をしたという。彼を背にしたヌーヴォレコルトが、その名のとおり、新しい記録を新世界アメリカのサンタアニタパーク競馬場に刻むことができるだろうか(写真4)。



写真4. BCフィリー&メアターフの表彰式  
クイーンズトラストを見事優勝に導いたF. デットーリ騎手(BC12勝目)と、馬を管理するイギリスのサー・マイケル・スタウト調教師。

### サンタアニタ競馬場とそこで出会ったスターたち

サンタアニタパーク競馬場はロサンゼルスダウンタウンから東に22キロほどの距離に位置する。西海岸で長い歴史を持つ競馬場であり、映画や小説で日本でも有名になった「シービスケット」が活躍し、最後のレースで勝利をおさめた舞台でもある。

シービスケットについて書き始めるときりがないが、サンタアニタパーク競馬場には、シービスケットの等身大のブロンズ像があり、かつてアメリカ中が熱狂したスターホースに今もなお尊敬の念をもって接する人が多いことがよくわかる。

サンタアニタパーク競馬場に足を踏み入れたとき、私はあまりの美しさに息をのんだ。広々とした馬場の向こうには、サンガブリエル山が連なっている。太陽の光を受けると、ダートと山が共鳴するかのようによく光る。その赤さは、太陽の光を受けているからというより、自らがそれぞれに発光しているかのような不思議な輝きだ。スターホースを生み出すのにふさわしい競馬場だ(写真5)。ロサンゼルスに近いので、なんとなく都会の風景を思い描いていた私は、嬉しい裏切りにあったようで、声を失い、立ち尽くした。目の前を走り去るスターホースを観るのも忘れて…。

ふと、後ろを振り向いた私は、さらなる驚きに包まれた。伝説と呼ぶべきスターたちが、次々と表れるからだ。スターホースではなく、レジェンドと呼ぶべき人たちだ。

皆、朝の調教を見にきたのだが、インタビューをお願いすると、気軽に応じてくださる。彼らは私の下手



図5. カリフォルニアの光に照らされるサンタアニタパーク競馬場

くそな英語にかんしゃくも起こさず、我慢強くふんふんと頷きながら聞き、真面目に答えるのだ。そして、「日本馬に幸運をね!」と、励ましてさえる。

お世話になった方は多すぎてすべてを紹介できないのが残念だが、とくに次の方々にはたくさんの教えをいただいた。

### クリス・マッキヤロン (写真6)

素晴らしい成績を誇る伝説の騎手で、BCを9勝し、アメリカ三冠競走にも6勝。競馬殿堂入りも果たしている。映画『シービスケット』では、技術顧問として有益なアドバイザーを務め、自らも俳優として参加している。映画の中の迫力あるレースシーンは、プロ中のプロ、マッキヤロンの助けを得て、可能となったのだらう。

### ゲーリー・ステューブンス (写真7)

映画『シービスケット』で主演級の役であるジョージ・アイスマン・ウルフを演じている。通算5,000勝以上を挙げている名手で、1997年競馬殿堂入りを果たした。膝の故障などで、2度、引退を宣言したものの、不死鳥のごとく蘇り、今もなお見事な騎乗で私たちをうならせる。



写真6. アメリカ競馬に今も貢献するクリス・マッキヤロン  
現在は競馬学校の校長でもあるという。



写真7. 未だに現役を続ける隠的な笑顔のゲリー・スティーヴンス。現在 53 歳。



写真8. 努力する天才ジェリー・ベイリー  
エクリプス賞最多7回受賞し、90年代のアメリカ最強馬シガーの主戦騎手。現在はテレビなどの解説を務める。

#### ジェリー・ベイリー (写真8)

現役時代に BC15 勝を含む 5,894 勝を挙げ、アメリカ競馬殿堂入りも果たした。騎乗した名馬は枚挙にいとまがないが、アメリカ最強馬であるシガーの主戦騎手であったことで広く知られている。

現在は競馬の解説者として活躍しているが、今もなお努力の人という印象を受けた。

ベイリーさんに「ヌーヴォレコルトについてどういうお考えですか?」と、言葉を向けると、彼は「ちょっと待ってね」とにっこり笑い、手にしたファイルホルダーに手を伸ばし、しなやかに指を動かすや、1枚のファイルをすっと取り出すや、「うーん、もしかしたら、昨年に挑戦した方がよかったかもしれません。元



写真9. レディ・イーライを復活させたチャド・ブラウン調教師

気いっぱいのときにね。けれども、陣営は日本から遠征させるに値する力があると判断したのでしょうか」と答えてくれた。その優雅な指がシガーを操ったのだ。

さらに、今回 BC に管理馬を出走させる調教師さんたちにも、お話を聞いた。

#### チャド・ブラウン調教師 (写真9)

ラチ沿いで調教を見守っていたブラウン調教師には、BC フィリーズ&メアターフに出走するレディイーライについて聞いたかった。レディイーライは調教中に釘を踏んだようで、怪我をし、蹄葉炎を発症。奇跡の回復をとげたばかりだったからだ。

師は言う。「脚の具合もいいし、心配はいらない」。その言葉を証明するかのように、目の前をレディイーライが力強く駆け抜けていく。思わず「フェニックスのように復活したのですね」と言うと、「ありがとう」と彼は笑顔を見せた。

一度は死さえ覚悟したレディイーライが勝利を収めることができたなら、サラブレッドは蹄葉炎さえ克服し、勝利者となれるということを証明する手本となろう。ブラウン調教師も言っている。「この馬ほど恵まれた馬はいない」と。

#### リチャード・マンデラ調教師 (写真10)

マンデラ調教師が送り出すのはアベンジだ。

G1 ロデオドライブ S で優勝し、今回の BC フィリーズ&メアターフの出走権を獲得した。レースは F. プラ騎手の手綱のもと、後続の追撃をものともせず振り



写真10. 厩舎でのリチャードマンデラ調教師と、BC フィリー & メアターフ3着のアベンジ  
前日のBCディスタフでは無敗を誇るソングバードを管理するピホルダーが直線の一騎打を鼻差で制するという歴史的レースを演出した。

切って優勝と強さを見せた。

マンデラ調教師とは厩舎でお会いした。こちらが恐縮するほど歓待してくださり、馬房の奥にいたアベンジを自ら引いて、こちらを向かせてくれた。その笑顔からはアベンジへの信頼と勝利への予感が読み取れたが、レースの作戦を問うと、当然のことながら「それは秘密だよ」と微笑むだけだけれど、騎手F. プラとの相性の良さについては満面の笑顔で「彼にまかせておけば大丈夫だ」とのことであった。

#### エイダン・オブライエン調教師 (写真11)

10月の凱旋門賞で1～3着を独占してから、まだ1ヵ月も経っていないオブライエン調教師にお祝いの言葉を伝えると、「ありがとう」と、心からの笑顔を見せた。BC フィリー & メアターフに出走するセブンスヘブンについて、「まだ3歳馬と若いですが…」と言葉を向けると、「輸送もうまくいって、問題はないです。アメリカの馬場は合うと思うので、挑戦できてハッピーです」とのこと。

オブライエン調教師は、馬にも人にも「ハッピーか?」と、問いかけ続ける。競馬場ではハッピーでなくては、ハッピーであるように努力しなくてはと思っているのかもしれない。

#### 斎藤 誠調教師 (写真12)

斎藤調教師が海外志向が強いトレーナーだというこ



写真11. 冷静かつ笑顔のエイダン・オブライエン調教師  
今年ハイランドリールでBCターフを制した。



写真12. 世界へ挑戦する斎藤 誠調教師  
BC フィリー & メアターフは11着に終わったが、その後デルマー競馬場で行われたレッドカーペットハンデキャップで見事優勝している。

とは知っていたが、改めてうかがってみると、「競馬を知ったら、発祥の地を知りたくなるのは当然でしょう」との答えだった。

海外へのチャレンジはそんな気持ちを持ってこそうまくいくのかもしれない。ヌーヴォレコルトも調教師の考えをわかっているかのように、輸送にも強く、帯同馬さえ求めないようだ。斎藤調教師の言葉によれば「普通の女の子とは違う」ということだった。

#### むすびに変えて

たった一度の経験をもとに、ブリーダーズカップについて語ることは愚かだとわかっている。わかっているが、ブリーダーズカップは開催地も変わり、出走

する馬も変わり、ひとつとして同じものではなく、ひとつひとつ検討していくべきレースだ。そう信じて、私が経験した2016年のサンタアニタパーク競馬場でのブリーダーズカップについて報告した。

私なりの感想だが、アメリカの競馬はファンに近づこうとする気持ちが強いと思う。アメリカでは他にバスケットボールや野球、フットボールなど、人気のあるスポーツが多いだけに、危機感を持って開催しないと、あっという間に斜陽産業となると恐れがあるのだろう。

プロレスの興業を行うような、激しさとタフさと明るさと、そして、強気の戦術がある。何よりも、とにかくファンを楽しませようとするエネルギーに満ちている(写真13)。

しかし、それに関わっている人は楽しんでなどいない。彼らは必死で売り上げを伸ばそうとしている。わざわざ競馬場に足を運んでもらうには、努力が必要だということを骨身にしみてわかっているのだ。だからこそ、ひたすらに馬を育て、1日にいくつものG1を行う大変さにも耐える。見事なレースを多くの人に見せるために、関係者は映画を製作するように、競馬をプロデュースしているようにみえる。

BCが終わって帰るとき、ロスの空港は猛烈に混みあっていた。用心して早めに飛行場についたのに、長い列ができ、身体検査も厳しく、時間がかかった。「どうなってるの」と言おうとして、当たり前だと思なおした。大統領選の2日前なのだから。

帰国してすぐ、ドナルド・トランプが勝利をおさめた。大統領就任式をテレビで見ながら、本当に世の中



写真13. 競馬だけではなく、ファッション・コンテストも行われています。

は何が起こるかわからないなと思った。

そして、トランプ当選後のアメリカで、初めてのG1が行われた。場所はルイジアナ州のフェア・グラウンズ競馬場。

ルイジアナは、トランプ大統領が選挙戦で選挙人を獲得したところだ。サンタアニタパーク競馬場があるカリフォルニアは、ヒラリー・クリントンを支持していたのだから、なんだか皮肉なものだと思う。80年前、シービスケットを管理したスミス調教師は、レースの日にはいつも共和党のネクタイをしめていたそうだ。

競馬も選挙も、先のことはわからない。ただし、良いレースをしようとする情熱は今も昔も必ず実を結ぶ。シービスケットへの思いは続いているのだ。それは、政治力すら及ばない独特の世界だと思う。

日本でのBCフィリー&メアターフの日本での売り上げは8億596万3,400円に達したという。遠い西海岸で、たった1頭でアメリカ競馬に挑んだ日本馬ヌーヴォレコルトのことを日本のファンは忘れてなどいなかったのだ。

初めてアメリカ競馬を観戦してみて、アメリカの競馬を理解するのは大変だと思った。それでも、やはりカウボーイの思いをいまだ残した野性的な競馬に触れられたことは得がたい経験であった。「アメリカ競馬を観ないで、競馬を知ったと思わないで」というアドバイスに、私は今、素直に頷くことができる。

一方で、今度彼らに会ったら言いたいことがある。

「日本人の競馬への思いにも目を向けてね」と。

今さらながら、それぞれの国にそれぞれの競馬、それぞれの人にそれぞれの競馬だと思わないではいられない。気の遠くなるような順列組み合わせを経て、レースは私たちの前に提供されるものなのだろう。

なお、この原稿を書くにあたって、たくさんの方にお世話になった(文中敬称略)。すべての方を書くには紙面が足りないけれど、サンタアニタパーク競馬場を知り尽くした写真家シグ・吉川さんには、何から何まで、本当によくしていただいた。ここに改めてお礼を申し上げたい。

# エッセイ

## 右脳をつぶやき

関 真澄 (写真・文)

Right-Brain Murmurings

Masumi SEKI

年の初め、2年間にわたり JRA 発行『優駿』誌上で発表させていただいていた『ウオッカ in アイルランド』が無事最終回を迎えた。ウオッカが引退してからアイルランドへは折をみて4年ほど通っただろうか。ダブリン空港へ到着する飛行機の窓から外を眺めていると、緑の国はいつも何か家に帰ってきたようなホッとした気持ちにさせてくれた。どこかしらを経由して30時間近い行程であるが、落ち着いた気に満ちた空気を吸うと長旅の疲れも途端に軽くなったものだ。そんな静かな気持ちのまま1時間ほどゆっくりと車を走らせネースの街に入り、夜には行きつけの運河脇のレストランでブラックプディングを賞味していたのも、こうして思い出していくと昨日のようでもあり、アイルランド

で出会った多くの人々の笑顔が懐かしく思い浮かんでくる。

幾度かの滞在も半分は悪天候で潰れたものだが、中には洪水災害になってしまったこともあり、窓の外を見ながら気が滅入る日々を過ごした思い出も随分とある。それでもどんよりした雨の中、ひたすらウオッカと対峙しているのだが、特殊なカメラを使用していたため、明るさが足りなければほぼ撮ることは不可能で、それでも1カットでも撮ればとの思いでスローシャッターを切り続けたものである。雨もそれはそれでしっとりとした絵になる趣もあるのだが、やはり太陽が降り注いだ時の素晴らしさにはかなわない。特にアイルランドの斜陽は絵心たっぷり、そのきらめき



ピロードの肌が美しい。「ウオッカ in アイルランド」はサラブレッドビューティーシリーズとして撮影された。

や陰影は実に深く印象的なもので、作風作りに腕を鳴らせながら悩みまくったものである。

よくこのシリーズにおいて「関さんはウオッカが大好きで追いかけて」などと言われることが多いのだが、この「好きで追いかけている」といったニュアンスには何らかの期待を感じることもあり、実は困っている…。確かにウオッカのレースにおけるドラマの数々は、この時を共にすることができたことは本当に幸せであったと、我が人生に悔いはなしとも言いたい程である。たまに映像を見返しても未だに鳥肌の立つ感動を覚える。しかしながらこの「好き」とのニュアンスを考えると、小生とウオッカの関係は、あくまでも写真家として「人生の中で出会った非常に数少ない魅力的な被写体」なのである。

さらにウオッカはアイルランドで母親となっているわけだが、子育てに関しては全くどこ吹く風であり、孤高の女王さながら悠然としている。子育て好きの小生としては、ここにも深い魅力は全く感じないのであるが、「女性」としては何とも言えない魅惑的な深みのある光があり、「撮りたい」と写真家特有の感性が感じてしまう。

実際の撮影でも彼女はもちろん見向きもしてくれない。何度と会った中でも触れ合ったのはほんの数分ではないだろうか。その時間はそれはそれで貴重な時なのだが、いかんせんこちらもシャッターを切らなくてはならず、終わったあとでゆっくりとお話ししましょうなんて気持ちにもなるが、そんなことは当然ウオッカは理解していないので、相手をしないとすぐに去って行ってしまふ。そんな触れ合いの自然な表情も可愛い



柔らかな光のなか気持ちよさそうに葉を食むウオッカ



アイルランドならではの人馬の信頼関係からとてもリラックスしている。

く、ストリートフォトのような撮影をしたいとも思うのだが、やはり時間が限られた中での作品づくりとなると頭を切り替えなくてはならず、アイルランドならではの自然を尊重しつつイメージを膨らませていった。

アイルランドは妖精の国と云われるような国であるから、その光も視覚だけでなく全ての感性に響いてくる。その中で自ずと膨張してしまうイメージを抑えるのに苦労しながら撮影するわけだが、当の彼女はもちろんじっとしてくれない。じっとしていても思った表情にはなってくれない。この被写体が人物ならば喋りながらコミュニケーションが取れていくのだが、そうした方向性や繋がりを合わせていくことがひたすらに難しいのが馬の撮影である。かといって、通常の張り付いての生態写真のごとくや決定的瞬間を狙うというのもまた違う作風であり、かの地でのセッションでこそその作品性を出したい、という思いがあり、最大のテーマでもあった。ただやはり、撮影に際しては溢れる心象を抑えこむのが一番の苦労であったかと思う。それほど美しすぎる時でもあった。

「もう1歩、2歩下がる」これは普段のサラブレッド撮影における訓戒であり心がけなのだが、写真における教えとしては全く正反対の心がけである。とかくサラブレッドの撮影においては大変気をつかうもので、特に日本では人馬の環境と共にこれから撮影文化が育まれていく段階と思っているのだが、それでも結果が重視される現代の風潮があり、さらにまた、特に芸術性のある作品や内容を期待されている部分を多々



妖精を思わせるアイルランドの森とウオッカ。「ウオッカ in アイルランド」の核となる作品。  
作品はギャラリー「サラブレッドアート」のHPで見ることができる。

感じている。

特に馬の作品において普段から感じているのは、アールブリュット（生の芸術）が求められているということである。対語ではアートカルチャー（芸術文化）になる。普段聞き慣れない言葉かもしれないが、芸術の分野ではこのように分類されている。どうもアートカルチャーを代表する商業芸術作品には、魂が揺れ動かないのもやむを得ないが、最近の世はデジタル化しているせいもあるのか、潜在的にこのアールブリュットをことさら求めている節がある。撮影においてはカメラを機械的に使用し、また光や色などの要素も様々な計算をしていくので、自然の光を利用しようとも、馬の持つ生命が表現されていようとも、作品においては撮り手側の計算が働くことはさげられない。そのようなことから決してアールブリュット（生の芸術）に

はなり得ないと考えている。あくまでもその表現はアートカルチャー（芸術文化）の域でしかない。しかしながら限られたセッションで心象表現するためにシャッターを切る一瞬、どの引き出しから何を出すかを決定する時には、その選択は実は「生の芸術」となり得ていることとなる。

撮影においては、レンズの選択から絞りやシャッタースピードなど、具体的なことを決定する際に、脳を物理的に働かせているのは確かだ。しかしながらそうした左脳による操作性を超え、それがあたかも感覚的に行えるようになった時に表現される作品こそ「生の芸術」となる。それでないと人に感動してもらえない真の作品への扉は開いていかないであろう。

最近、ギャラリー「サラブレッドアート」というサラブレッドをモチーフに創作活動をしてきたアーティ

ストたちの集まりの場ができたのだが、技術的なプロフェッショナルたちは、そうしたことを悩みながらも感覚的に行う術を持ち合わせている。超越した自然体という部分であるが、実はそこには心の自分が表現されてしまうので、これを後で見返すことがとても怖い。それは終わりなき表現への入り口となり、空想と現実、表現と理想の追求は果てしなく、創作の苦しみが永遠に暗黒として続くのである。なので小生のウオッカにおける作品も、狭い床下の奥の深く掘った穴に嚴重に閉じた壺の中にでも入れてしまっておかないと大変なことになる。しかるに仕事として評価するのは良いが、よく聞かれる作品としての良し悪しなどは到底つけられる類のものではない。

ただ「真の作品」は何かと言えば、1つには作品から発する「波長」と言えるかもしれない。最近知人か

ら小生の作品は「響く」という表現が合っていると教えられたのだが、心に届き、訴え、感動させることができるような波長が出ている作品を残すことこそ正に到達したい形である。そしてその作品からの響きが、正しき歩みの力になればと切に願っている。

作品活動としてはまだまだ道半ばの坂道であり、生涯においてもとても納得できる作品には到達できないであろうとは、思いたくはないが間違いはない。そのせいか、実は創意工夫しながらも苦手な左脳を使って勉強している過程に、これは幸せな時なのかもしれないと、昨今やたら実感するのである。と同時に、未だ日本サラブレッド写真史は激動期であると感じるに至り、混沌とした芸術表現と現実の狭間でもがきながら、夢見る夢男の挑戦も良いではないかと、一人星を見ながらふけったりもしている。



#### — 著者プロフィール —



関 真澄  
(せき ますみ)

東京都武蔵野出身、兵庫県明石在住。'90年フリーカメラマン、照明技師として独立。映像、ファッション、ポートレート、料理など幅広く広告全般で活動後、馬事業界へ。'96年より写真家へとスタンスを置き換え独自の作品活動を始める。競馬では、モノクロで国内外のジョッキー60人を撮影した「ジョッキーの肖像」、世界で唯一超望遠2,000mmレンズで、競馬の真実と迫力に焦点をあてた15年間の集大成「2000の真実」等を『優駿』誌に発表、また同誌でのインタビュー写真でも独自の感覚で多数のホースマンを撮影し好評を得た。また、英国グランドナショナル、AUSのメルボルンCup等を撮影し日本に紹介するなど海外での活動も積極的に行っている。'10年にメルボルンにて述べ70万人を集めたBIG写真展「PhotoFinish」では、日本人として初めて招待され、世界の写真家20人に選出された。

現在は「サラブレッドビューティー」として名馬を鋭意撮影。また、アートディレクターとしても活躍、サラブレッド、ブライダル、生前写真集や社史など普遍的なテーマを中心に手がけている。'15年ギャラリー「サラブレッドアート」を主宰、馬事芸術文化の普及や医療福祉教育分野との連携に努めている。現在は「White Beauty ゴールドシップ」を撮影中。創作工房スタジオリーヴス代表。

# Journal of Equine Science

Vol. 28, No. 3, September 2017

## 和文要約

### 総説

輸送時の馬の問題行動に伴うリスクをいかに最小化するか？—Amanda YORK<sup>1</sup>, Judith MATUSIEWICZ<sup>1</sup>, Barbara PADALINO<sup>1,2</sup> (Charles Stuart University, Australia,<sup>2</sup> University of Bari, Italy) …………… 67

この総説は、馬の輸送時における問題行動 (transport-related problem behaviours; 以下 TRPBs) の発生をいかに軽減するかについて、実践上役に立つと考えられる研究成績を提供することを目的としている。TRPBs は、馬運車に乗るのを馬が嫌がったり、輸送中に馬が騒擾したりするなど、馬関係者にとって日常的に遭遇する望ましくない行動である。TRPBs は馬のみならず馬取扱者にも傷害を負わせたり、馬運車のドライバーの運転操作ミスを誘発したり、スケジュールを狂わせたり、競技に参加できなかつたり、輸送後の馬の競走 (技) 能力を低下させたりする可能性がある。そのため TRPBs は人馬双方にとって危険要因と見なされる。また種々の文献から TRPBs は馬産業全般にわたって共通に認められる関心事項であり、「馬運車輸送: horse trailer loading」のキーワードで YouTube を検索すると 67,000 件がヒットするほど多くの人に関心を持ち、またさまざまな対処法が提案されている。本総説では、過去 35 年間に報告された TRPBs に関する論文を渉猟し、それらの知見を要約し、TRPBs に関して推奨できる見分け方、対処法、予防法を提示した。人と馬の良好な関係、注意深い事前のトレーニング、積み込みと輸送の系統だったトレーニング、適切な馬の取り扱い、運転手の運転技術などが TRPBs を最小限に抑えるためには肝要といえる。馬と馬の取扱者に対して適切な学習理論に基づいた注意深い事前のトレーニング、積み込みや輸送への馴致、自発的乗車行動は明らかに TRPBs を軽減することがわかったが、馬ならびに馬取扱者の安全とウェルフェアの観点からこれらが強く推奨される。この総説から馬の TRPBs の発生を大幅に減らすためには、馬輸送に関するさらなる研究と教育が不可欠であることが示唆された。

### 原著

1 歳未満のサラブレッド種育成馬における体成長・代謝および生殖の内分泌機能に与える日本の南北気候影響の比較——Siriwan TANGYUENYONG<sup>1,2</sup>, 佐藤文夫<sup>1,3</sup>, 南保泰雄<sup>1,4</sup>, 村瀬晴崇<sup>3</sup>, 遠藤祥郎<sup>3</sup>, 田中知己<sup>1,5</sup>, 永岡謙太郎<sup>1,2</sup>, 渡辺 元<sup>1,2</sup> (岐阜大学大学院連合獣医学研究科基礎獣医学,<sup>2</sup> 東京農工大学大学院獣医生理学,<sup>3</sup> 日本中央競馬会日高育成牧場,<sup>4</sup> 帯広畜産大学臨床獣医学,<sup>5</sup> 東京農工大学大学院獣医臨床繁殖学) …………… 77

本研究では、日本の南北で異なる気候が、1 歳未満のサラブレッド種育成馬に対し、体成長・代謝および生殖の内分泌機能に与える影響を、長日処理 (LS) の効果と合わせて比較検討した。実験には日本中央競馬会・北海道日高育成牧場および宮崎育成牧場で飼養されている 1 歳未満のサラブレッド種育成馬を用いた。対照群は自然光条件下で飼養し、LS 群には明期が 14.5 時間、暗期 9.5 時間になるように人工照明で補った。北海道群の LS 群は雄 44 頭と雌 47 頭、宮崎群は雄 11 頭と雌 11 頭である。末梢血液中の総サイロキシン (T4), IGF-1, プロラクチン (PRL), コルチゾル, プロジェステロン (P4) 濃度を、LS 開始の 1 週間前 1 回と、開始後には月に 1 度、RIA 法あるいは蛍光免疫測定法で測定した。体成長の指標として体重、体高、胸囲、管囲を月毎に測定した。また、被毛の状況 (HS) を観察し数値化した。自然光条件下では北海道群が宮崎群に比べ、T4 が高い傾向を示したのに対して、雄の IGF-1, 雌雄の PRL は有意に低値を示した。成長指標と HS 値も北海道群が低かった。LS によって PRL と P4 は北海道群、宮崎群で共に上昇し、初回排卵が対照群より早まる傾向が見られた。北海道群でのみ LS によって有意に被毛の改善が見られた。LS による効果として、PRL, P4, T, HC の値が北海道群で増加して、宮崎群と同等のレベルに達した。体重と管囲の増加率が北海道群で 1 月に劇的に減少し、その後徐々に増加して宮崎群のレベルに達した。これらの結果から、自然条件下の北海道群では基礎代謝の増加により恒常性を

維持している判断された。しかしながら、1歳未満の育成馬に長日処理をすることで、北海道でも宮崎と同等に体成長と繁殖機能の促進を期待できると考えられた。

チルドロン酸投与下で立位 MRI 検査により経過観察した繫靭帯起始部に骨損傷を認めたサラブレッド種競走馬の4症例——溝部文彬<sup>1</sup>、野村基惟<sup>1</sup>、加藤智弘<sup>1</sup>、南保泰雄<sup>2</sup>、山田一孝<sup>3</sup>（<sup>1</sup>日本中央競馬会栗東トレーニング・センター競走馬診療所、<sup>2</sup>帯広畜産大学臨床獣医学研究部門、<sup>3</sup>麻布大学獣医学部）…………… 87

競走馬において、繫靭帯起始部の骨損傷（OISL）を始めとする管近位部の異常は、跛行の原因となる主要な病態の1つである。本研究においては、2～4歳のサラブレッド種競走馬に対して、低磁場立位 MRI（sMRI）検査による OISL の診断および経過観察を実施した。全ての症例に共通する sMRI 検査所見として、第三中手骨の海綿骨領域における T1 強調画像での低信号、T2\* 強調画像での等～高信号と周囲の無信号、ならびに脂肪抑制画像での高信号が認められた。検査後、全ての症例において、肢端部局所還流法によるチルドロン酸（50 mg）の投与を実施した。なお、投与は週1回とし、計3週間実施した。その後、3症例において、T2\* 強調画像および脂肪抑制画像における良化所見として、上昇した信号強度の減衰が認められた。これら3症例については、休養および調教強度の制限によって競走復帰を果たした。著者らの知る限り、OISL を発症したサラブレッド種競走馬において、チルドロン酸投与下で sMRI 検査により経過観察した症例については、これまで報告されていない。本研究から、管近位部の異常による跛行症例において、複数回の sMRI 検査により治癒過程を評価することにより、適切なタイミングでの調教再開が可能となると考えられた。以上から、既存の診断装置では診断あるいは経時的な病態評価が困難であった繫靭帯起始部炎症例に対して sMRI 検査を応用することで、適切な調教開始のタイミングを知るための治癒過程のモニタリングにおいて、sMRI 装置が臨床応用可能であることが明らかとなった。

サラブレッドの加齢による心拍数と心拍変動の変化——大村 一<sup>1</sup>、James H. JONES<sup>2</sup>（<sup>1</sup>日本中央競馬会競走馬総合研究所、<sup>2</sup>School of Veterinary Medicine, University of California, Davis, U.S.A.）…………… 99

サラブレッドの安静時心拍数と心拍変動に関して、生後24時間以内の仔馬から高齢馬について加齢による影響を調査した。調査には83頭の健康なサラブレッ

ドを使用した。安静時心拍数は生後まもなくから年齢が上がるにつれて低下した。全てのウマの年齢と心拍数の間には  $Y = 48.2X^{-0.129}$  ( $R^2 = 0.705$ ) で示す相関が認められた。また、生後まもなくから7歳までの馬齢と心拍数の間には  $Y = 44.1X^{-0.179}$  ( $R^2 = 0.882$ ) で示す相関が認められた。最も高い心拍数は7日齢の仔馬で認められ、 $106 \pm 10.3$  回/分であった。LF パワーおよび HF パワーは生後まもなくから高齢になるにつれ増加した。これらの心拍数および心拍変動に関する変化は加齢によるものと考えられた。競走期の3～7歳のサラブレッドは、全てのグループで最も低い  $32.9 \pm 3.5$  回/分の心拍数を示し、LF パワーおよび HF パワーは最高齢馬のグループを除いては一番高い値を示した。これらの結果は、トレーニング効果によるものと考えられた。25歳以上の最高齢のグループのサラブレッドは、最も高い HF パワーと最も低い LF/HF 比を有した。個別のウマでは最高齢馬グループの15頭中8頭が1.0以下の LF/HF 比であった。高齢馬の自律神経バランスは若いウマと比べて異なる可能性が示された。

## 短 報

サラブレッドの重度の慢性蹄葉炎症例における magnetic resonance imaging (MRI) と computed tomography (CT) の特徴的所見——山田一孝<sup>1</sup>、乾 智博<sup>2</sup>、伊藤めぐみ<sup>2</sup>、柳川将志<sup>2</sup>、佐藤文夫<sup>3</sup>、富成雅尚<sup>3</sup>、溝部文彬<sup>4</sup>、岸本海織<sup>5</sup>、佐々木直樹<sup>2</sup>（<sup>1</sup>麻布大学、<sup>2</sup>帯広畜産大学、<sup>3</sup>日本中央競馬会日高育成牧場、<sup>4</sup>日本中央競馬会栗東トレーニング・センター、<sup>5</sup>東京農工大学）…………… 105

両前肢に慢性蹄葉炎を罹患したサラブレッドに対して MRI と CT を、同日に実施した。MRI と CT いずれも第三指骨背側の皮質骨の部分欠損と骨硬化像を描出した。CT は蹄の角質部分と骨の状態を反映したのに対し、MRI は葉状層の炎症と腱の浮腫を描出した。三次元 CT 静脈造影では、左右の血管が描出されたものの、蹄冠部血管と回旋動静脈の血管走行には、左右差が認められた。MRI と CT の組み合わせによって、蹄の詳細な病態観察が可能であった。

セボフルラン吸入麻酔とアルファキサロン—メドミジン持続静脈内投与の併用により長時間に及ぶ整形外科手術の麻酔管理を行ったサラブレッド種競走馬の1症例——和久野 愛<sup>1</sup>、前田達哉<sup>1</sup>、小平和道<sup>1</sup>、菊地拓也<sup>1</sup>、太田 稔<sup>1</sup>（<sup>1</sup>日本中央競馬会美浦トレーニング・センター競走馬診療所）…………… 111

サラブレッド種競走馬の長時間に及ぶ整形外科手術

において、セボフルラン吸入麻酔とアルファキサロン—メデトミジン CRI を併用して麻酔管理を行った。メデトミジン、ブトルファノールおよびミダゾラムによる前処置後、アルファキサロンおよびグアイフェネシンにより導入した。維持麻酔は、セボフルラン吸入麻酔とアルファキサロンおよびメデトミジン CRI を併用した。手術時間は180分、麻酔時間は230分であった。術中の平均終末呼気セボフルラン濃度は1.8%であり、麻酔中の平均動脈圧は70 mmHg以上に維持された。吸入麻酔終了から起立までに要した時間は65分であった。本麻酔法は、長時間に及ぶ整形外科手術の麻酔法として有用である可能性が示唆された。

CT および MRI 検査により側頭舌骨関節骨関節症の初期病変を捉えたサラブレッド種仔馬の1症例——乾 智博<sup>1</sup>、山田一孝<sup>2</sup>、伊藤めぐみ<sup>1</sup>、柳川正志<sup>1</sup>、樋口 徹<sup>3</sup>、渡邊あきこ<sup>4</sup>、今村 唯<sup>1</sup>、占部眞子<sup>1</sup>、佐々木直樹<sup>1</sup>（<sup>1</sup>帯広畜産大学臨床獣医学研究部門、<sup>2</sup>麻布大学獣医学部、<sup>3</sup>NOSAI 日高家畜診療所、<sup>4</sup>日高門別ホースクリニック）……………117

側頭舌骨関節骨関節症は側頭舌骨関節を構成する茎状舌骨と側頭骨錐体部の進行性の骨増生により、前庭障害や顔面神経麻痺を引き起こす疾患である。一般的に、頭部 X 線検査および喉嚢内視鏡検査により診断される。今回、斜頸および片側の耳介下垂により前庭障害および片側顔面神経麻痺が疑われた6ヵ月月齢のサラブレッド種仔馬に対し、CT および MRI 検査を実施した。CT 検査では右側の側頭舌骨関節の癒合と骨増生が確認された。MRI 検査では、側頭舌骨関節骨関節

症の原因と考えられる中耳炎像が確認された。CT および MRI 検査により、側頭舌骨関節骨関節症の初期病変に対してより感度が高い診断と病態の理解が可能であった。

サラブレッド幼駒の近位種子骨先端部骨折の病理組織学的検索——佐藤文夫<sup>1,2</sup>、遠藤祥郎<sup>1</sup>、堀内雅之<sup>3</sup>、富成雅尚<sup>1</sup>、村瀬晴崇<sup>1</sup>、石丸睦樹<sup>1</sup>、頃末憲治<sup>1</sup>（<sup>1</sup>日本中央競馬会、<sup>2</sup>岐阜大学大学院連合獣医学研究科、<sup>3</sup>帯広畜産大学）……………123

サラブレッド幼駒の近位種子骨の先端部には、X 線検査により骨折様所見がしばしば認められることがある。これまで、この所見が近位種子骨先端部の骨折なのか二次骨化中心なのか議論の余地があったが、病理組織学的検索は行われていない。本調査では、その他の疾患で31週齢までに剖検処置された30頭の仔馬の四肢球節部 X 線検査を行い、近位種子骨先端部に X 線骨折所見を認める3症例を得て、その病理組織学的検索を行った。その結果、X 線病変部では、柱状の骨組織が離断し、結合織が増殖している様子が見られた。また、7週齢の症例では線維性の結合組織が離断部位を満たしていたが、2週齢および5週齢の症例では離断部の結合織による充填は不完全であった。さらに X 線所見が見られない種子骨先端部にも病理組織学的に軟骨下骨の離断所見が認められる症例もあった。以上の病理組織学的所見から、幼駒の近位種子骨先端部に見られる X 線所見は、物理的に離断した軟骨下骨の治癒過程であることが明らかになった。幼駒の飼養管理において、本所見は有用な知見であると考えられる。

# 臨床委員会 DVD 販売のお知らせ

日本ウマ科学会臨床委員会では、過去に開催された臨床委員会主催の招待講演ならびに実習のDVDを販売しています。

## <お申し込み方法>

以下の申込用紙をご利用いただくか、メールで事務局までお申し込みください。

## <価格および代金のお支払い方法>

価格は1セット **3,000円** (税込) です。

お申し込み後、折り返し合計代金をご連絡いたしますので、ご確認の上、下記口座まで代金をお振込みください。納金確認後、宅配便にてお送りいたします。なお、お手数ですが送料は受取人様払いでお願いいたします。

郵便振替口座 記号番号：00130-3-539393

または

ゆうちょ銀行(9900) 〇一九(ゼロイチキュウ)店 当座預金口座 539393

口座名：日本ウマ科学会(ニホンウマカカクカイ)

----- キリトリセン -----

## 申込用紙

ご希望のDVDと枚数	(1) 2009年(第22回学術集会) Dr. Brooks	眼科	( ) セット
	(2) 2010年(第23回学術集会) Dr. Richardson	整形外科	( ) セット
	(3) 2011年(第24回学術集会) Dr. LeBlanc	繁殖	( ) セット
	(4) 2012年(第25回学術集会) Dr. Dyson	跛行診断	( ) セット
	(5) 2013年(第26回学術集会) Dr. White	急性腹症	( ) セット
	(6) 2014年(第27回学術集会) Dr. Scott	装蹄	( ) セット
	(7) 2015年 Dr. Mama & Steffey	麻酔	( ) セット
	(8) 2016年(第29回学術集会) Dr. Ducharme	呼吸器	( ) セット
お名前			
ご送付先住所			
ご所属			
電話番号			
メールアドレス			

連絡先：日本ウマ科学会事務局

FAX：0285-44-5676

e-mail：e-office@equinst.go.jp

住所：〒329-0412 栃木県下野市柴1400-4 JRA競走馬総合研究所

## 協賛団体名

団体名	〒	住 所
日本中央競馬会	106-8401	東京都港区六本木 6-11-1 六本木ヒルズゲートタワー
地方競馬全国協会	106-8639	東京都港区麻布台 2-2-1 麻布台ビル

## 賛助会員名簿

(五十音順)

会員名	〒	住 所
(株)アイベック	170-0002	東京都豊島区巢鴨 1-24-12 アーバンポイント巢鴨 4F
公益財団法人 軽種馬育成調教センター	183-0024	東京都府中市日吉町 1-1 東京競馬場内
公益財団法人 ジャパン・スタッド ブック・インターナショナル	105-0004	東京都港区新橋 4-5-4 日本中央競馬会新橋分館 6F
DS ファーマアニマルヘルス(株)	541-0053	大阪府大阪市中央区本町二丁目 5-7 大阪丸紅ビル 10 階
一般社団法人 日本競走馬協会	106-0041	東京都港区麻布台 2-2-1 麻布台ビル
公益社団法人 日本軽種馬協会	105-0004	東京都港区新橋 4-5-4 日本中央競馬会新橋分館 3F
一般財団法人 日本生物科学研究所	198-0024	東京都青梅市新町 9-2221-1
公益社団法人 日本装削蹄協会	111-0051	東京都台東区蔵前 4-5-9 O.T ビル 4F
公益社団法人 日本馬事協会	104-0033	東京都中央区新川 2-6-16 馬事畜産会館 7F
一般財団法人 馬事畜産会館	104-0033	東京都中央区新川 2-6-16
文永堂出版(株)	113-0033	東京都文京区本郷 2-27-18
(株)ペティエンスメディカル	194-0022	東京都町田市森野 1-27-14 サカヤビル 2F

# Hippophile 投稿に関する基準

(2013年4月1日一部改定)

- ① 本誌の投稿は、Hippophile 投稿規程（以下「規程」という。）に基づくことを基本とする。
- ② この基準は、投稿者が投稿しやすいよう投稿分野ごとに細目を定めたものである。
- ③ 原稿を本誌の目的に沿ったものにするため、1～3名の審査員により審査を行い、事務局（(株)アイベック）を通じて投稿者と調整を行う。審査員の指摘を受けた投稿者は速やかに事務局に回答するものとする。その目的は、多種多様な本学会会員に対し、解りやすく美しい文章で、かつ投稿者の真意が正確に伝わる記事にすることにある。

編集委員（長）および審査員は、掲載の可否にあたっては、内容が特に営利目的でないもの、あるいは偏った個人批判、地域批判、団体批判を含まないものであることに留意する。
- ④ 本誌は、図表のカラー化を取り入れていることから、良好なピントや色彩を求める。
- ⑤ 本誌は、各号のページ数を刷上り約40ページとするため、投稿ページ数に制限を設ける。ただし、やむを得ない場合は、投稿者と協議のうえ、編集委員長がページ数を決定する。
- ⑥ 図は、写真を含めて図と称し、番号を付け、タイトルと説明文を付記することとする。その大きさは縦6.0cm×横8.5cmとするが、説明文のスペースの関係から図1枚につき縦約7cm取ることをとする。ページ数の調整の関係で編集委員（長）の一任により図のサイズを決定することがある。
- ⑦ 投稿者は顔写真（カラー）と略歴（150字程度）を添付することとする。
- ⑧ 刷上り最大24字×42行×2段＝2,016字の字数が1ページに印刷可能であり、これを目安に投稿することとする。
- ⑨ 図1枚の占めるスペースの字数は約168字となる。
- ⑩ 表にはタイトルと説明文のほか、必要に応じて注釈・解説文を添付することとし、表の大きさは、ページ数を考慮し、審査員と編集委員（長）が協議のうえ決定する。
- ⑪ 投稿者に原稿料（1ページにつき3千円）を支払う。ただし、原則として研究論文や施設紹介には支払わない。原稿料は、刷上りのページ数により算出し、ページ半分に満たない部分は切捨てとする。ただし、5ページ相当の原稿料（1万5千円）を上限とする。
- ⑫ 投稿者は、原稿内容により、以下の各コーナーの分類について要望又は指定することができる。

## 総説：

【ウマの科学的分野における研究の総括と展望】

- ① 文献展望を主体とし、刷上りは図表を含めて10ページ以内程度とする。

## 科学論文・一般学術論文：

【ウマ科学に貢献する未発表・他の学術誌に未掲載の和文論文】

- ① オリジナリティーの高いもの。
- ② 科学論文は、研究目的、材料・方法、成績・結果、考察、纏めが適切に記述されている自然科学の論文とする。
- ③ 一般学術論文は、自然科学に準ずるが、馬の文化、経済学、芸術、歴史などの人文科学の論文とする。
- ④ 刷上りのページ数は図表を含めて10～12ページ以内程度とする。
- ⑤ 引用文献の書き方はJESの投稿規程に準ずる。本文中のナンバリングは上付きとし、引用文献順に掲載する。但し、著者名の記載は1名あるいは2名までとし、3名以上の場合は代表者1名を記載し「その他、あるいはet al.」として記載する。

## 馬事往来：

【馬との関わりについての提言、レポート、エッセイなど】

- ① 馬の文化や科学の実態を会員が相互に理解しておく必要性のあるもの。
- ② 刷上りのページ数は図表を含めて3ページ程度とする。

## 馬事資料：

【馬に関連する資料の掲載】

- ① 日本の馬事資料として保存しておく必要性のある内容のものを掲載。
- ② 刷上りのページ数は図表を含めて3ページ程度とする。

## 特別記事：

【馬に関連する競技会やイベント、利用実態などの記事】

- ① 馬に関係する各種催し物や活動状況などを紹介。
- ② 刷上りのページ数は図表を含めて3ページ以内とする。

## 馬事施設紹介：

【馬の文化・科学に関わる施設の紹介】

- ① 日本の馬事文化、研究、教育、乗馬等に関わりのある施設などの紹介記事。
- ② 刷上りのページ数は図表を含めて3ページ以内とする。

## 学術集会記事：

【馬に関する学術集会における講演内容等の掲載】

- ① 本学会の学術集会等を主体に掲載。
- ② 刷上りのページ数は図表を含めて3ページ程度とする。

## 関連研究会記事、その他：

- ① 規程に準じて取り扱う。
- ② 刷上りのページ数は1～2ページとする。
- ③ いずれのコーナーにも該当しないものにあつては、編集委員長が新たにコーナーを設けることができる。

## 編集後記

ヒポファイル編集委員の山野浩一さんが逝去されました。山野さんは2001年5月発行の本誌No. 10以来の編集委員としてヒポファイルの発展に尽力されてきました。編集子が山野さんに初めてお会いしたのは確か1987、8年ごろだったと記憶しています。片や高名なSF作家にして競馬評論家、片や駆け出しの研究者でしたが、山野さんは若い人にも隔たりなく接してくれる人という印象を強く受けました。文理両道の山野さんはひところ競馬ブックに馬のサイエンスについて集中連載をされていたことがありました。その中で私たちが取り組んだ育成期の馬の至適放牧地条件（面積とか放牧する馬の数など）に関する研究を大きく取り上げてもらい、だいぶ勇気づけられたのを思い出します。SF関係者、馬関係者との合同の偲ぶ会が計画されているようですが、きっとその人柄を慕う多くの方が参集することでしょう。つつしんでご冥福をお祈りいたします。

さて、No. 70の最初の記事は旋丸巴さんによるばんえい競馬の応援団の話です。かつての北海道の農林水産業は、馬が支えていたといっても過言ではありません。馬の力比べから発したばんえい競馬は北海道の馬文化の象徴ともいえます。ばんえい競馬存続の危機を契機に始まったNPO法人が馬文化を広める活動に発展した10年の歴史を、旋丸さんに活写してもらいました。

馬事資料は前号に続き池田収さんによるオリンピック級の競技馬の品種に関する論考の馬場馬術編です。馬場馬術は演技の流麗さを競う競技です。チームを支える各国のコーチングスタッフについて言及しているところも読みどころといえます。

特別記事、三浦暁子さんの競馬観戦記は、今回は米国西海岸サンタアニタパーク競馬場で開催されたブリーダーズカップです。この競馬の仕組みから始まって、当日の興奮を余すところなく伝えていただきました。

エッセイは関真澄さんにお願いました。2007年、戦後初めて牝馬として日本ダービーを制したウオッカ。現在彼女は欧州で繁殖生活を送っていますが、関さんは美しい風景の中にいる彼女の写真を数多く発表してきています。エッセイともどもお楽しみください。

(編集委員長 楠瀬 良)

---

### 入会申し込み方法

下記宛にお申し込み下さい。年会費は5,000円(国内)です。

日本ウマ科学会事務局

〒329-0412 栃木県下野市柴1400-4

JRA 競走馬総合研究所内

電話 0285-39-7398 FAX 0285-44-5676

E-mail : e-office@equinst.go.jp

---

## Hippophile, No. 70, 2017

2017年9月発行

<http://jses.equinst.go.jp/>

編集委員長：楠瀬 良

発行者：青木 修

〒329-0412 栃木県下野市柴1400-4

JRA 競走馬総合研究所内

電話 0285-39-7398 FAX 0285-44-5676

郵便振替口座番号 00130-3-539393

または

ゆうちょ銀行(9900) 〇一九(ゼロイチキュウ)店

当座預金口座 539393

口座名：日本ウマ科学会(ニホンウマカガクカイ)

印刷者：株式会社 アイベック

〒170-0002 豊島区巣鴨1-24-12

電話 03-5978-4067